

日本の芸術家の生活実態および家族内世代間の影響度の分析

周防 節雄

神戸商科大学 情報処理教育センター

1 研究概要

これまで我々の研究グループは、1986 年以来、約 15 年間に亘り 5 年周期で 4 回「日本の芸術家 4000 人調査」（以下、「芸術家調査」と呼ぶ）を実施してきた。この間、調査票の一部手直しや、コンピュータを取り巻くソフトウェア・ハードウェアの急激な進展で、その時々構築してきた調査データのデータベースの構造が異なったままになっていた。回次ごとに閉じた形で分析をしている間は、不便を感じなかったが、4 時点まで揃うと、時系列分析や、パネルデータに編成して分析する必要性が出てきた。これまでは、必要に応じてその都度、4 時点の対応する変数だけ取り出して分析をしていたのだが、これでは、データベース編成に関わった者だけが、何とか使えるデータでしかない。そこで、先々のことも考慮に入れて、この際、4 時点のデータベースを統合して、誰にでも使いやすい形に再編成することにした。

本研究期間の 3 年間に、第 4 回芸術家調査を実査・分析しながら、第 4 回調査のデータベースの整備をした後、過去の 3 回の調査のデータベースを再編成し、4 回分の調査データベースを統合的に構築した。

こうしてできたデータベースを使って、芸術家の年収について 4 時点の時系列比較を行った後、擬似パネルデータを編成し、個票レベルで年収の 4 時点の変化の状況を分析した。

更に、家族内世代間の影響度を分析しているが、調査内容は芸術家の形成期に関する事柄が多く、ある一定の年齢に達した回答者からは毎回同じ回答が得られると予想できるので、時系列比較をする場合は、回答者の年齢でコントロールするきめの細かい分析が必要となる。今回は、時間的な制約もあり、この分析については、第 4 回調査の結果のみを掲載するに留めた。

2 芸術家調査の実査

2.1 調査目的

芸術家調査は、プロの芸術家に焦点をしばって、ほぼ 5 年を周期として過去 15 年間に 4 回実施してきた。この調査は、これまで日本の政府統計でほとんど完全に欠落している文化統計を作成することを第一の目的としている。ここで対象としている舞台演奏家等は、日本経済の進展に伴うサービス業の拡大という点で、職業集団としては今後一層拡大していくはずであるけれども、現段階では十分な調査が行われているとは言えない。しかも所得分布等から見ると、少数のスーパースターの高額所得者グループと、アルバイト収入に頼る大多数の低所得者グループという、典型的な双峰分布をなす興味深い事例である。

本論文では、今回調査した第 4 回調査の分析、および、これまでの 4 回分の調査データを擬似的に個票レベルでリンクさせて擬似パネルデータを編成し、これを使って分析を行っている。これによって、ミクロレベルで所得分布などの時系列分析が可能となる。

2.2 調査の経緯と概要

芸術家調査は、1986年に『わが国の芸術活動の動向予測に関する基礎研究』（文部省科学研究費特定研究(1):研究代表者:三善晃)のプロジェクトにおいて、音楽・演劇・舞踊の3つのジャンルに属する演奏舞台芸術家を調査対象として初めて実施された。調査項目としては、①キャリア形成(A票)、②所得・収入・支出・生活時間(B票)の両側面から芸術家の生活実態を分析可能な内容になっている。特に、キャリア形成については、本人はもとより、親、祖父母、子の四世代に亘り回答を求めている。

これら①と②の全ての調査項目について同一の調査対象者から回答を求めるのは回答者の負担が大きすぎ、回収率にも影響を与えかねないので、実査の際は、調査対象者を二つのグループに分け、一方にA票を、もう一方のグループにB票を郵送した。基本属性(classification data)についてはA、B両調査で共通の調査項目としており、両調査の結果を統計的照合により情報量を拡大することが出来るように設計されている。この方式は、その後の調査でも踏襲された。

更に、1990～1991年度にかけて行われた『わが国文化・芸術情報の体系化と統計調査方法の研究』（文部省科学研究費総合研究(A):研究代表者:永山貞則)のプロジェクトにおいて、日本の職業的舞台演奏芸術家の他に新たに美術家も加えて、第1回とほとんど同じ内容のアンケート調査が実施され、これが第2回目の芸術家調査に当たる。

そして、第3回芸術家調査は、1996～1998年度にかけて行われた『パネルデータによる日本の芸術家の生活実態の分析』（文部省科学研究費重点領域研究:領域代表者[松田芳郎]、研究代表者:[周防節雄])のプロジェクトにおいて、第2回調査とほぼ同じ調査票を用いて郵送調査を行った。

今回の第4回調査は、『芸術・文化政策のための統計指標の開発と体系化に関する研究』（文部科学省科学研究費・特別研究促進費(1):研究代表者:若松美黄[2001～2002年度]、周防節雄[2003年度])のプロジェクトにおいて、第3回調査とほぼ同じ調査票を用いて、2002年12月～2003年1月にかけて郵送調査を行った。(調査票の内容については論文末尾の付録に調査票の複製を添付した。)

2.3 調査対象者と回収率

各芸術ジャンルの名鑑類に掲載されている芸術家を調査対象者とし、名鑑類から住所などの必要な情報を調査毎にデータベース化して、郵送調査をしてきた。調査間の比較が容易にできるように、可能な限り毎回同じ名鑑を利用しているが、第3回以降の調査では、演劇のジャンルでそれまで使っていた『新劇便覧』（テアトロ刊）が刊行中止のために、『日本新劇俳優協会会員名簿』を利用した。このため、表2.1および表2.2に示すように、演劇では第2回調査から第3回調査への継続調査対象者の割合が他のジャンルに比べて低くなっている。また、音楽でも第3回から第4回調査で継続調査対象者が減少しているが、これは第4回調査ではオーケストラ団員に対して未調査のためである。

表2.1は、舞踊、音楽、演劇の三ジャンルにおける調査対象者の脱落・継続・新規参入の状況を示している。この表から第1回調査(1986年)と第2回調査(1991年)、第2回調査と第3回調査(1996年)、第3回調査と第4回調査(2001年)において連続して調査対象者となった割合をサバイバル率として、三ジャンルについてそれぞれ計算した(表2.2)。

表 2.1 調査対象者の脱落・継続・新規参入の状況

舞踊			音楽			演劇		
1986年	計	72	1986年	計	1,018	1986年	計	768
脱落→	1,159	1,087	脱落→	4,229	3,211	脱落→	2,770	2,002
継続→		1,341	継続→		4,414	継続→		2,782
新規参入→	254	計	新規参入→	1,203	計	新規参入→	780	計
1991年	計	319	1991年	計	1,220	1991年	計	1,818
脱落→	1,341	1,022	脱落→	4,414	3,194	脱落→	2,782	964
継続→		1,310	継続→		4,458	継続→		2,239
新規参入→	288	計	新規参入→	1,264	計	新規参入→	1,275	計
1996年	計	281	1996年	計	2,232	1996年	計	707
脱落→	1,310	1,029	脱落→	4,458	2,226	脱落→	2,239	1,532
継続→		1,311	継続→		3,069	継続→		2,210
新規参入→	282	計	新規参入→	843	計	新規参入→	678	計

第4回調査に使用した名鑑、名簿は以下の①～⑦である。このうち⑦の『文化庁芸術家在外研修員の会名簿』は第4回調査ではじめて使用したが、少数の美術家が含まれている。第2・3回調査の時に利用した『(社)美術家連盟 会員名簿・便覧』は入手不可のため、第4回調査では、美術家独自の名簿は使えなかった。

- ①『演奏年鑑』2002年版、(社)日本演奏連盟
- ②『舞踊年鑑 25』2001年版、全日本舞踊連合
- ③『日本新劇俳優協会会員住所録』(2002)、2002年版、日本新劇俳優協会
- ④『日本演出者協会会員住所録』(2002)、2002年版、日本演出者協会
- ⑤『日本新劇経営製作者協会会員住所録』(2002)、2002年版、日本新劇経営製作者協会
- ⑥『日本舞台監督協会会員住所録』(2002)、2002年版、日本舞台監督協会
- ⑦『文化庁芸術家在外研修員の会名簿』1999年版、文化庁在外研修員の会

表 2.2 調査対象者のサバイバル率

サバイバル率	舞踊	音楽	演劇
1986年から1991年	0.94	0.76	0.72
1991年から1996年	0.76	0.72	0.35
1996年から2001年	0.79	0.50	0.68

これまでに行った4回の調査の回収率を表2.3に示す。また、回収した調査票のA、B票別の内訳を表2.4に示す。ただし、ここでいう「調査対象者」の数は調査票発送時の人数ではなく、実査中に判明する物故者や宛先不明で戻ってくる調査票の数を差し引いた値である。表2.5に第4回調査のジャンル別の詳しい回収状況を示す。

表 2.3 芸術家調査の調査対象者数・回答者数と回収率

	美術	舞踊	演劇	音楽	合計
第1回 調査対象者	-	1,159	2,770	4,229	8,158
第1回 調査回答者	-	227	540	1,259	2,079
第1回 回収率(%)	-	19.6	19.5	29.8	25.5
第2回 調査対象者	3,978	4,933	2,409	4,414	15,734
第2回 調査回答者	1,104	748	567	1,108	3,537
第2回 回収率(%)	27.8	15.2	23.5	25.1	22.5
第3回 調査対象者	4,759	3,467	2,239	4,458	14,923
第3回 調査回答者	1,201	317	452	776	2,746
第3回 回収率(%)	25.2	9.1	20.2	17.4	18.4
第4回 調査対象者	242	1,258	2,229	3,010	6,739
第4回 調査回答者	83	180	510	594	1,367
第4回 回収率(%)	34.3	14.3	22.9	19.7	20.3

第1回調査回答者数にはジャンル不明の53人含む

第2回調査回答者数にはジャンル不明の10人含む

表 2.4 回収したA票・B票の内訳

	A票	B票	A+B	
第1回	演劇	294	246	540
	舞踊	139	88	227
	音楽	702	557	1,259
	合計	1,152	927	2,079
第2回	演劇	311	256	567
	舞踊	402	346	748
	美術	499	605	1,104
	音楽	634	474	1,108
合計	1,851	1,686	3,537	
第3回	演劇	190	151	341
	舞踊	173	143	316
	美術	655	546	1,201
	音楽	458	316	774
	スタッフ	57	57	114
合計	1,533	1,213	2,746	
第4回	演劇	188	172	360
	舞踊	99	75	174
	美術	41	41	82
	音楽	365	226	591
	スタッフ	90	70	160
合計	783	584	1,367	

(単位:人)

【注】第1回ジャンル不明A票17、B票36
第2回はジャンル不明A票5、B票5含む
スタッフの大多数は演劇関係者である

表 2.5 第4回芸術家調査回収状況

		演劇	音楽	舞踊	美術	スタッフ	合計
A票	郵送数	693	1,537	677	137	498	3,542
	無効数(あて先不明)	36	28	49	21	36	170
	無効数(調査拒否等)	2	3	4	0	1	10
	回収数	188	365	99	41	90	783
	実質送付数	655	1,506	624	116	461	3,362
	回収率(%)	29	24	16	35	20	23
B票	郵送数	692	1,536	676	136	499	3,539
	無効数(あて先不明)	31	29	39	10	44	153
	無効数(調査拒否等)	1	4	3	0	2	10
	回収数	172	226	75	41	70	584
	実質送付数	660	1,503	634	126	453	3,376
	回収率(%)	26	15	12	33	15	17
合計	郵送数	1,385	3,073	1,353	273	997	7,081
	無効数(あて先不明)	67	57	88	31	80	323
	無効数(調査拒否等)	3	7	7	0	3	20
	回収数	360	591	174	82	160	1,367
	実質送付数	1,315	3,009	1,258	242	914	6,738
	回収率(%)	27	20	14	34	18	20

※ジャンル不明の調査拒否1件は含めず

2.4 調査票A、Bの振り分け

調査の項目のうちでキャリア形成は、5年経っても基本的な回答項目については概ね変わらないと推定できる。そのため前回調査で調査Aの回答を求めた人については、次回調査では調査Bの回答を求め、前回で調査Bの回答を求めた人については、次回は調査Aの回答を求めることにより、継続調査対象者の場合には、同一の調査対象者のA、B両票のデータを得たことになる。従って、A、Bの振り分けに先立って、今回の調査対象者のファイルと、前回調査(5年前)の調査対象者のファイルとを、漢字の氏名でマッチングを施すことにより、継続調査対象者と新規調査対象者とに分離し、継続者には前回調査時の調査票でない方の調査票を配布するように実査時に配慮している。この操作は第2回以降の調査の実査の際に必ず行っている。その後で、最終的に当該調査のA票とB票の配布数がジャンル毎に同数になるように、新規調査者にA票、B票を割り振っている。

3 第4回芸術家調査A票・B票の統合分析

3.1 A票・B票に共通する調査項目

A票・B票には、以下に示すように、同じ設問が設けてある。これらの属性のうち、概ね時間の経過に左右されない①～⑥は、6節で述べるパネル作成に使われている。

- ①活動している芸術のジャンル
- ②性別
- ③生年
- ④出生地・現住地
- ⑤続柄と配偶関係
- ⑥最終学歴・芸術活動のための訓練場所
- ⑦本人の所得・家族全体の所得
- ⑧将来の、自分の芸術活動状況の予測

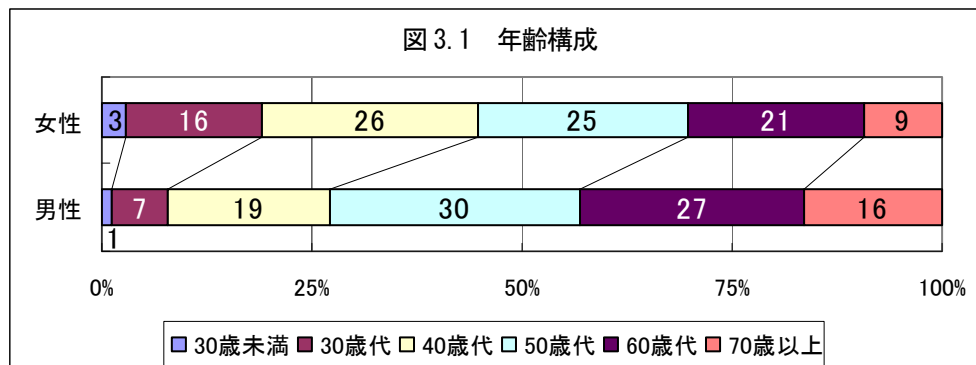
3.2 基本属性の分布

まず、活動している芸術のジャンル、性別、年齢の分布を見る。活動している芸術のジャンルは音楽が 591 人 (43.2%) で多く、次いで、演劇 360 人 (26.3%)、舞踊 174 人 (12.7%)、スタッフ 160 人 (11.7%)、美術 82 人 (6.0%) と続く。今回、美術は前回まで利用していた名簿が入手できなかったため、調査対象者からはずしてあり、ここにある「美術」は『文化庁芸術家在外研修員の会』の名簿の掲載されている人々である。性別では男性が 766 人、女性 600 人で、男性が女性の数を上回っている。

A、B 票双方の全回答者の年齢分布 (2001 年末現在の年齢) を 5 大ジャンル別で見ると、数の少ない美術、舞踊を除くと、60 歳あたりでややくぼんでいる山形になっている。(論文末尾の付図 1) ちなみに、2004 年の『日本統計年鑑』の文化関連職業従事者数の分布を参考として付図 2 に示した。国勢調査のこの数字は、必ずしも芸術を生計の主たる生業としている人々ばかりとはいえないので、本調査の調査対象者と単純比較は出来ないが、60 歳前後で各ジャンルの芸術家の数が減っている様子は窺えない。参考までに 6 節の表 6.3 と図 6.1 に、これまでの調査データの年齢分布も合わせて示している。

平均年齢	
全体	55.0 歳 (男 57.1, 女 52.2)
演劇	55.0 歳 (男 57.9, 女 50.2)
舞踊	59.6 歳 (男 62.1, 女 58.7)
美術	53.5 歳 (男 53.7, 女 52.2)
音楽	53.9 歳 (男 57.1, 女 50.7)
スタッフ	54.8 歳 (男 56.0, 女 46.9)

図 3.1 は男女別の年齢構成の割合である。



3.3 年代と芸術家としての現役度

この調査は日本の“現役”の芸術家を対象としたものである。そこで、調査回答者がこの点で調査の目的に沿ったものであるかどうか、即ち、回答者の「現役度」を測るために、一番最近に行った演奏・舞台関連の仕事の時期を質問している。

少なくとも過去 3 年間に活動を行っている (少なくとも 2000~2002 年に活動を行っている) という条件で見ると、男性の場合、40 歳未満では 95% 以上、50 代まででも 90% 以上を保っているのに対し、女性は、40 歳未満で約 90%、40 代で 95% まで上昇して、50 代やや下がり、60 代で再び上がってから、再び下り始めているので、女性は、男性に比べると、加齢とともに現役を退く傾向がある。

一番最近に演奏・舞台活動を行った年齢は、全体の平均が 54.4 歳であり、調査時点の平均年齢 55.0 歳に対して、平均で 0.6 年前には演奏・舞台活動を行っていることになり、高齢者も含

まれていることを考えると、回答者はほぼ現役として演奏・舞台活動を行っているということが出来る。この「一番最近の演奏・舞台活動時の平均年齢」を性別に見ると、男性は56.6歳、女性は51.5歳である。ジャンル別に見ると、演劇は54.6歳（調査時点の平均年齢55.0歳、差0.6歳）、舞踊58.8歳（同59.6歳、差0.8歳）、美術52.5歳（同53.5歳、差1.0歳）、音楽53.2歳（同53.9歳、差0.7歳）、スタッフ54.6歳（同54.8歳、差0.2歳）である。さらに男女別では、演劇男性57.3歳（調査時点の平均年齢57.9歳、差0.6歳）女性50.0歳（同50.2歳、差0.2歳）、舞踊男性62.3歳（同62.1歳、差-0.2歳）女性57.7歳（同58.7歳、差1.0歳）、美術男性52.6歳（同53.7歳、差1.1歳）女性51.5歳（同52.2歳、差0.7歳）、音楽男性56.5歳（同57.1歳、差0.6歳）女性49.9歳（同50.7歳、差0.8歳）、スタッフ男性55.7歳（同56.0歳、差0.3歳）女性47.7歳（同46.9歳、差-0.8歳）である。差が負の数になるのは、欠損値があるために、平均を求めるための母数が違っているからである。

以上見たように、性別、年齢、ジャンル等による特徴はあるものの、この調査の回答者は芸術家としての現役度がかなり高いと言える。

3.4 出生地・現在の活動地

調査回答者の出生地を以下の11地域に分類すると、東京が31.5%で最も多い。

- ①北海道・東北 ②関東（東京と神奈川を除く） ③東京 ④神奈川、
- ⑤北陸・中部 ⑥東海 ⑦近畿（京都と大阪を除く） ⑧京都、
- ⑨大阪 ⑩中国・四国・九州 ⑪外国。

一方、現在の主な活動場所を示す現住地は、東京が48.9%、東京、神奈川以外の関東地方が10.6%、神奈川が10.5%で、東京、神奈川も含めた関東地方全体で、70.1%、大阪、京都も含めた近畿地方全体が13.2%である。このことから、関東地方と近畿地方で全体の80%強となり、この調査の大多数の回答者は、都心近くに住んでいると言える。

ジャンル別に現住地を見ると、演劇では、東京が71.9%で、東京、神奈川を含めた関東地方全体では90%近くを占めている。美術でも東京が26.8%で一番多いが他のジャンルと比較すると、東京在住の割合は非常に低く、他のジャンルよりは住んでいる地域が散らばっているという特徴がある。しかし、演劇以外のジャンルでも、東京在住の割合は、舞踊44.3%、音楽40.9%、スタッフ43.1%、美術26.8%となっていて、全てのジャンルで東京在住の割合が最も高く、美術も含め、どのジャンルでも東京は最重要の芸術活動地であるといえる。

次に出生地と現住地の関係を見ることによって、現在の主な芸術活動の場所へ出生地からどのように移動したかを知ることができる。まず、関東地方全体の出身者の90%以上（589人中534人）は関東地方に在住しており、近畿地方を除く他の地域の出身者でも少なくとも半数以上（北海道・東北50.7%、北陸・中部64.5%、東海55.5%、中国・四国・九州59.0%、外国80.0%）が関東に居住している。近畿出身者だけは、246人中、関東在住の者が98人（39.8%）で、地元には127人（51.6%）が在住している。このことは、近畿地方には、地元で芸術活動をする場があるということを示唆している。

表3.1では出生地から他所へ移動した人数の割合（%）を示している。

表 3.1 出生地から現住地への移動の割合 (%)

出生地 現住地	北海道 東北	関東	東京	神奈川	北陸 中部	東海	近畿	京都	大阪	中国 四国 九州	外国	計
北海道・東北	26.5	1.4	0.7	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	1.7	1.2	2.5	3.4
関東	10.6	38.9	10.7	5.8	10.5	7.3	8.4	2.1	7.8	6.9	17.5	10.6
東京	43.9	50.0	70.5	38.4	46.1	36.4	22.9	44.7	23.3	42.2	55.0	48.9
神奈川	6.8	2.8	8.4	51.2	7.9	11.8	6.0	6.4	5.2	9.8	7.5	10.5
北陸・中部	0.0	1.4	0.7	0.0	18.4	0.0	0.0	2.1	0.0	0.6	2.5	1.5
東海	1.5	1.4	1.2	1.2	5.3	35.5	0.0	4.3	0.0	1.2	5.0	4.2
近畿	3.8	0.0	0.7	0.0	1.3	1.8	42.2	8.5	15.5	5.2	5.0	5.8
京都	0.8	0.0	0.9	0.0	1.3	0.9	2.4	19.1	4.3	1.7	2.5	2.0
大阪	2.3	0.0	0.9	2.3	2.6	2.7	9.6	10.6	35.3	3.5	2.5	5.5
中国・四国・九州	1.5	0.0	1.2	0.0	1.3	1.8	4.8	2.1	1.7	25.4	0.0	4.5
外国	0.8	1.4	3.2	1.2	1.3	0.9	3.6	0.0	1.7	1.2	0.0	1.9
計	9.7	5.3	31.5	6.3	5.6	8.0	6.1	3.4	8.5	12.7	2.9	100.0

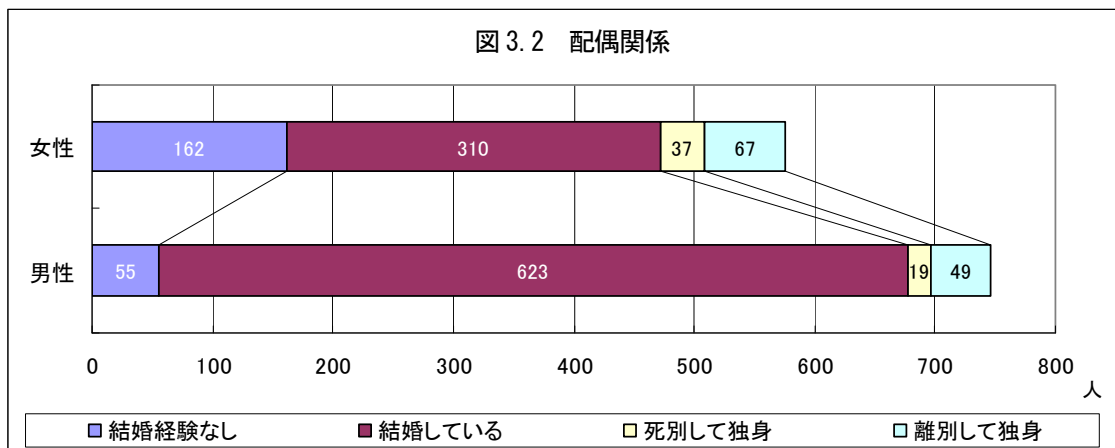
3.5 続柄と配偶関係

この調査の回答者の続柄は、男女とも長男・長女が一番多いが、養子・養女も約0.6%（男性0.4%、女性0.8%）含まれている。ジャンル別では、舞踊家に養子（2.2%）、養女（2.3%）の割合が高い（表3.2）。

表 3.2 続柄

男性					女性				
続柄 分野	長男	長男以外	養子	計	続柄 分野	長女	長女以外	養女	計
演劇	122	102	1	225	演劇	82	49	2	133
舞踊	25	19	1	45	舞踊	75	50	3	128
美術	41	30	0	71	美術	5	6	0	11
音楽	173	112	1	286	音楽	215	87	0	302
スタッフ	86	51	0	137	スタッフ	16	6	0	22

次に、配偶関係を見ると、回答者全体の68.3%が現在結婚しており、「死別して独身」は4.1%、「離別して独身」は8.5%である。未婚者は1368人中217人（15.9%）である（図3.2）。



当然ではあるが、男性、女性ともに30代から、既婚者が多くなる。また、「離別して独身者」の比率は、20代（女性0.0%、男性14.3%）、30代（女性6.1%、男性7.7%）、40代（女性7.1%、男性8.8%）、50代（女性18.1%、男性9.3%）、60代（女性15.0%、男性2.9%）、70代（女性8.5%、男性3.4%）で、男性に比べて女性の方が結婚生活を続けるのが難しい様子がうかがえる。また、性別で「離別して独身」の割合を見ても、女性11.2%、男性6.4%であり、

どの年代でも女性の方が高い。この数字から、芸術活動を続けていく上で結婚は、女性にとって男性よりも難しいということがわかる。ジャンル別に見ると、結婚していない者は舞踊の女性が174人中46人で一番多い。

また結婚した時の平均年齢は30.8歳で、男女別では、男性31.6歳、女性29.3歳である。男性の中には60代で結婚した者も766人中6人(0.8%)と僅かながらいるが、再婚者も含まれると思われる。性別、ジャンル別に見ると舞踊の男性が32.7歳で、他のジャンルの男性に比べてわずかに高く、女性では演劇が30.2歳で他のジャンルより高い。結婚した平均年齢が最も若いのは舞踊の女性で27.6歳である。

3.6 収入の分布

表 3.3 平均年収(単位:万円)

本人と家族全体の年収

全ジャンル(演劇・舞踊・美術・音楽・スタッフ)における家族全体の収入(税込み年収)の平均は、883万円で、芸術家本人の年収の平均は615万円である(表3.3)。ただし、「家族全体の収入」は必ずしも「世帯収入」とは限らず、回答者によって解釈が異なっている。

家族全体の平均年収を性別で見ると、女性900万円、男性860万円で女性の方が高い。ジャンル別で見ると、音楽が1049万円で一番高い。性別、ジャンル別では、音楽の男性が1095万円で一番高く、美術の男性、音楽の女性と続く。

平均年収		有効回答者数	本人年収	家族年収	
5ジャンル		444	615	883	
ジャンル	演劇	328	416	614	
	舞踊	135	627	878	
	美術	72	824	980	
	音楽	500	710	1,049	
	スタッフ	148	623	874	
性別	性別不明	1	500	500	
	男性	687	730	900	
	女性	495	456	860	
ジャンル	演劇	男性	207	500	646
		女性	121	274	559
	舞踊	男性	38	703	865
		女性	97	597	884
	美術	男性	61	901	1,045
		女性	11	396	618
	音楽	性別不明	1	500	500
		男性	251	919	1,095
		女性	248	499	1,005
	スタッフ	男性	130	658	869
		女性	18	373	908

芸術家本人の平均年収を見ると、性別では、男性730万円、女性456万円と逆転する。ジャンル別では美術が824万円で一番多いが、これも男性901万円、女性396万円で、女性の芸術家の年収は男性の半分にも満たない。ジャンル別で最も年収が低いのは演劇で、本人年収は平均が416万円、性別およびジャンル別では、演劇の女性は274万円であり、演劇の男性も500万円と男性の中では一番低くなっている。詳細ジャンル別(表3.4)で音楽の男性の平均年収を見ると、最も高収入のジャンルは、1人しかいないジャンルを除けば、洋楽の指揮で、次は声楽である。

表3.5に、ジャンル別、性別の本人年収の分布を示している。本人の年収が1000万円以上の者は、女性の11.3%、男性の25.8%でかなり男女差があるといえる。ジャンル別では美術が高く、女性の18.2%、男性の41.0%が相当する。舞踊以外のジャンルではやはり男性の方が女性よりも高い比率を示している。舞踊だけは、男性が38人中5人(13.2%)、女性が97人中15人(15.5%)と、男女の値が逆転している。

表 3.4 詳細ジャンル別平均年収（単位：万円）

平均年収		有効 回答者数	本人年収	家族年収
ジャンル	詳細ジャンル			
演劇	歌舞伎	-		
	能狂言役者	1		
	新派・新国劇	2	165	920
	現代劇	242	362	582
	映画	2	360	360
	声優	7	936	1,057
	放送タレント	5	325	490
	その他の俳優	10	566	773
	制作事業	43	636	735
	演劇評論	3	533	677
演劇その他	13	387	508	
舞踊	日舞	40	556	774
	プリマ	20	632	708
	コールド	2	265	385
	現代舞踊	36	582	929
	振り付け師	18	711	1,131
	制作事業	6	1,522	1,653
	舞踊評論	1		
	舞踊その他	12	494	698
美術	日本画	8	981	1,135
	油絵	12	783	850
	水彩画	3	850	850
	西洋画その他	7	690	807
	木版	5	680	780
	銅版	3	710	967
	石版	4	663	1,100
	版画その他	2	426	464
	写真	5	980	1,300
	グラフィック	2	1,150	1,200
	彫刻	10	1,015	1,165
	美術その他	11	756	946
	音楽	三弦	1	
琴		3	983	983
笛		2	675	925
邦楽の打楽器		1		
鍵盤楽器		129	630	1,063
弦楽器		79	646	1,128
管楽器		47	691	873
洋楽の打楽器		8	548	769
洋楽の声楽		143	732	1,037
長唄義太夫等		-		
指揮		26	1,040	1,439
作曲		53	815	1,007
編曲		1		
音楽事業		1		
音楽評論		-		
音楽その他	6	717	717	
スタッフ	台本	18	685	833
	舞台監督	33	534	819
	演出	63	559	880
	舞台美術デザイナー	7	919	1,019
	大道具	1		
	衣装	1		
	かつら	1		
	照明	9	662	844
	音響	2	432	863
	スタッフその他	13	873	1,004

【注】回答者が1人だけのジャンルは、値を表示していない。

図 3.3 は家族全体の年収に占める本人年収の割合を示している。この図を見ると、女性では本人年収の割合が10%未満の者は6.1%、男性では0.4%ある。本人年収だけが家族の年収である者は女性49.1%に対し、男性55.6%であり、また、本人年収が家族年収の70%以上を占める者は75.8%、女性は52.7%であることから、収入面では男性が主要な役割を荷っているといえる。さらに年代別（10歳刻み）に見ると（表 3.6）、女性の場合、本人年収が家族年収の半分にも満たない者は50代までは30%以上だが、男性の場合は20代で25%、30代から40代では20%以下、50歳以上では1割を下回る。つまり、男性は30歳を超えると本人年収は家族年収に接近してくるが、女性の場合には、50歳を過ぎても両者の差は依然として大きい。

このことは、収入において男性は結婚して独立した家計を持つようになり、働き盛りの間は家計の重要な稼ぎ手であることを示している。つまり、男性は一家を構えるためにある程度以上の収入の水準が必要だが、女性は必ずしも収入面で一家を支える必要がない場合が多いため、収入水準が低くても自分の芸術活動を継続していくことが可能であることを示唆している。言い換えれば、収入水準の低い芸術ジャンルで活動する女性を収入面で支えている家族こそが、芸術に対する最大のパトロンということになり、文化政策の問題点を露呈している。

表 3.5 ジャンル別・性別の本人年収の分布

本人年収 (万円)	ジャンル別						性別						
	演劇	舞踊	美術	音楽	スタッフ	計	性別不明	男性		女性		計	
							実数	実数	%	実数	%	実数	%
年収不明	32	39	10	91	12	184	0	79		105		184	
0-100	27	9	0	20	3	59	0	10	1.5	49	9.9	59	5.0
100-200	48	11	6	43	5	113	0	33	4.8	80	16.2	113	9.6
200-300	72	20	4	42	15	153	0	69	10.0	84	17.0	153	12.9
300-400	57	13	8	46	18	142	0	80	11.6	62	12.5	142	12.0
400-500	34	12	1	45	21	113	0	65	9.5	48	9.7	113	9.6
500-600	19	13	6	42	15	95	1	67	9.8	27	5.5	95	8.0
600-700	14	12	5	38	18	87	0	54	7.9	33	6.7	87	7.4
700-800	9	11	2	29	14	65	0	43	6.3	22	4.4	65	5.5
800-900	13	11	12	35	12	83	0	60	8.7	23	4.6	83	7.0
900-1000	7	3	1	26	3	40	0	29	4.2	11	2.2	40	3.4
1000-1100	13	5	11	51	7	87	0	60	8.7	27	5.5	87	7.4
1100-1200	1	0	0	5	1	7	0	5	0.7	2	0.4	7	0.6
1200-1300	3	3	3	26	7	42	0	35	5.1	7	1.4	42	3.6
1300-1400	1	2	4	11	1	19	0	16	2.3	3	0.6	19	1.6
1400-1500	1	1	2	3	1	8	0	7	1.0	1	0.2	8	0.7
1500-1600	3	2	1	13	3	22	0	15	2.2	7	1.4	22	1.9
1600-1700	0	1	1	3	0	5	0	4	0.6	1	0.2	5	0.4
1700-1800	1	0	1	1	1	4	0	4	0.6	0	0.0	4	0.3
1800-1900	1	0	1	4	0	6	0	5	0.7	1	0.2	6	0.5
1900-2000	0	0	1	2	0	3	0	3	0.4	0	0.0	3	0.3
2000-	4	6	2	15	3	30	0	23	3.3	7	1.4	30	2.5
計	328	135	72	500	148	1183	計	687	100.0	495	100.0	1183	100.0

注：年収不明者は「計」に含まない。

図 3.3 家族全体の年収に占める本人年収の割合

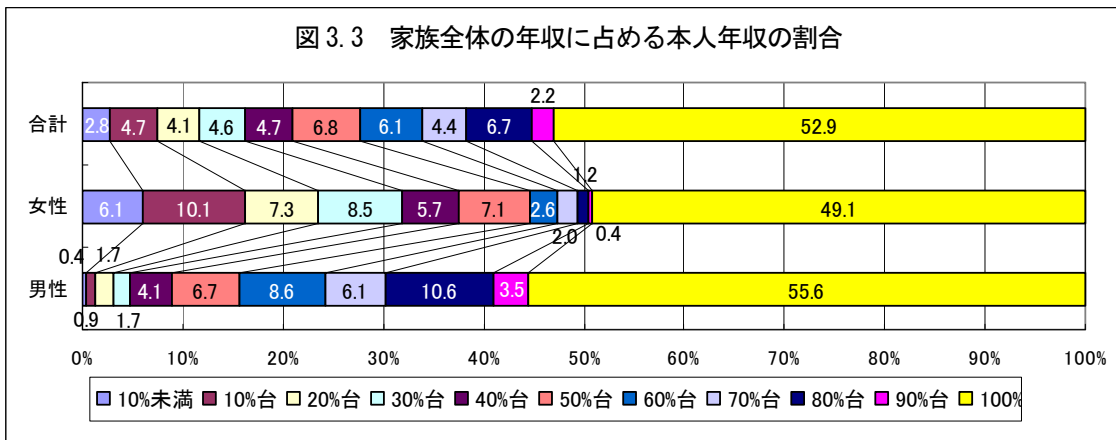


表 3.6 家族年収に占める本人年収の割合の比較（性別・年代別）

男性

本人年収÷ 家族年収	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代		70歳代以上		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
年収不明	1		8		11		22		18		19		79	
10%未満	0	0	1	2.3	0	0.0	2	1.0	0	0.0	0	0.0	3	0.4
10%台	1	12.5	1	2.3	3	2.2	0	0.0	0	0.0	1	0.9	6	0.9
20%台	1	12.5	1	2.3	3	2.2	2	1.0	4	2.1	1	0.9	12	1.7
30%台	0	0	0	0.0	4	2.9	2	1.0	4	2.1	2	1.9	12	1.7
40%台	0	0	2	4.5	9	6.6	5	2.4	9	4.8	3	2.8	28	4.1
50%台	0	0	2	4.5	6	4.4	13	6.3	20	10.7	5	4.7	46	6.7
60%台	1	12.5	4	9.1	9	6.6	19	9.3	19	10.2	7	6.5	59	8.6
70%台	0	0	3	6.8	8	5.9	15	7.3	11	5.9	5	4.7	42	6.1
80%台	1	12.5	4	9.1	16	11.8	21	10.2	14	7.5	17	15.9	73	10.6
90%台	0	0	0	0.0	11	8.1	8	3.9	1	0.5	4	3.7	24	3.5
100%	4	50	26	59.1	67	49.3	118	57.6	105	56.1	62	57.9	382	55.6
合計	8	100.0	44	100.0	136	100.0	205	100.0	187	100.0	107	100.0	687	100.0

女性

本人年収÷ 家族年収	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代		70歳代以上		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
年収不明	4		14		26		16		26		19		105	
10%未満	0	0.0	7	8.3	12	9.4	8	6.0	3	3.0	0	0.0	30	6.1
10%台	2	15.4	8	9.5	19	14.8	16	12.0	5	5.0	0	0.0	50	10.1
20%台	2	15.4	8	9.5	10	7.8	9	6.8	6	5.9	1	2.8	36	7.3
30%台	0	0.0	7	8.3	14	10.9	12	9.0	6	5.9	3	8.3	42	8.5
40%台	0	0.0	4	4.8	11	8.6	5	3.8	7	6.9	1	2.8	28	5.7
50%台	3	23.1	5	6.0	13	10.2	8	6.0	4	4.0	2	5.6	35	7.1
60%台	0	0.0	1	1.2	3	2.3	2	1.5	7	6.9	0	0.0	13	2.6
70%台	0	0.0	0	0.0	1	0.8	5	3.8	3	3.0	1	2.8	10	2.0
80%台	0	0.0	1	1.2	3	2.3	2	1.5	0	0.0	0	0.0	6	1.2
90%台	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	2.0	0	0.0	2	0.4
100%	6	46.2	43	51.2	42	32.8	66	49.6	58	57.4	28	77.8	243	49.1
合計	13	100.0	84	100.0	128	100.0	133	100.0	101	100.0	36	100.0	495	100.0

その他の収入

その他の収入として、仕送り金、奨学金、助成金などがあるが、以下の数字を見る際は、回答者の記入そのものが少なく、詳細な回答を拒否しているケースが多いように思われる。まず、仕送り金は全体の1.5%の20人があると答えており、奨学金は0.3%(4人)、助成金は1.2%(17人)があると答えている。ジャンル別では、美術の2.4%(2人)が仕送り金を受けていて一番多い。奨学金を受けているのは、全体の0.3%(4人)と極めて少ない。助成金は全ジャンルで見られるが、舞踊の2.9%(174人中5人)が最も多い。

表 3.7 は、仕送り金のある人の年代別、ジャンル別、性別に見たものである。

表 3.7 仕送り金がある人の年代

分野 年齢	演劇		舞踊		美術		音楽		スタッフ		計	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
30歳未満										1		1
30歳代	1	3						1			1	4
40歳代		1						4				5
50歳代		1			1	1		1			1	3
60歳代			2	1			2				4	1
70歳代												
80歳代												
90歳代												
計	1	5	2	1	1	1	2	6		1	6	14

仕送り金があるのは親からの仕送りを受ける年齢の若い者と、子から仕送りを受ける比較的年齢の高い者を予想していたが、それ以外の年齢の人にも仕送りがある。性別では、女性の方が仕送りを受けている者が多いことが伺える。

3.7 教育・訓練

演奏・舞台芸術家が「最後に通った」学校（最終学歴）を見ると、回答者全体のなかで、1367(1人性別不明)人中 869 人 (64%) が大学・大学院で、270 人 (20%) が高卒である。ジャンル別に見ると、音楽が 591(1人性別不明)人中 495 人 (84%) が、大学・大学院で、非常に高学歴といえる。音楽は性別で見ても男女共に高い割合で大学・大学院と答えており、男女による学歴の差はほとんどないといえる(表 3.8 参照)。

表 3.8 ジャンル別最終学歴

最終学歴 分野	男性					計	女性					計
	最終学歴不明	2.小・中学校	3.高等学校	4.短大・高専	5.大学・大学院		最終学歴不明	2.小・中学校	3.高等学校	4.短大・高専	5.大学・大学院	
演劇	6	7	67	25	121	226	2	0	57	39	36	134
舞踊	4	5	16	4	16	45	5	6	62	22	34	129
美術	2	5	5	6	53	71	0	0	2	1	8	11
音楽	5	9	11	18	243	286	3	7	18	24	252	304
スタッフ	6	5	26	9	92	138	0	0	6	2	14	22
計	23	31	125	62	525	766	10	13	145	88	344	600

また、その学校の所在地を、出生地・現住地と同じく 11 地域別に見ると、学校所在地は東京が半分以上を占めている。出生地と最終学校所在地の関係を見ると、京都、大阪以外の地域の出身の場合は、東京の学校が最も多い。京都と大阪だけは、出生地にある学校に通うケースが多い。京都と大阪を含む近畿地方全体でも同じ近畿地方にある学校に通うケースが多いが、その他の出生地の者は東京の学校に行くケースが最も多く、次いで出生地の学校が続く。

次に、芸術活動の訓練場所（複数回答）では、個人教授・師匠（534 人）が一番多く、次いで大学（530 人）、訓練所・養成所（426 人）で、ほとんどが、専門的なところで訓練・修行している（表 3.9）。ジャンル別に見ると、スタッフは現場での修行が多く、実践的なものが求められることがわかる。また音楽は「個人教授・師匠」と「大学」が多いことから、他のジャンルよりも専門的な教育の場が用意されていると言える。また、演劇では「訓練所・養成所」が最も多い一方で、現場での修行も相当数を占めている。舞踊では「訓練所・養成所」と「個人教授・師匠」が圧倒的な割合を占める一方で、舞踊と音楽では「父・母・養父母」の果たす役割も大きい。

表 3.9 芸術活動のための訓練場所（複数回答）

訓練場所	演劇 354人	舞踊 165人	美術 81人	音楽 578人	スタッフ 156人	Total 1334人
訓練所・養成所	223	85	13	59	46	426
個人教授・師匠	44	77	8	384	21	534
現場での修行	152	16	3	32	97	300
父・母・養父母	5	26	0	39	5	75
その他	12	7	10	63	23	115
小・中学校	3	1	1	9	1	15
高校	8	2	4	114	4	132
短大	16	3	2	25	4	50
大学	42	12	52	399	25	530

3.8 将来の見通し

最後に、演奏・舞台芸術活動従事者が自分の将来についてどのように考えているかについて分析した。

現在の演奏・舞台芸術の仕事を将来どれくらいの期間続けていくつもりであるかどうかを、「5年以内」、「5年後」、「10年後」に分類して尋ねている(表3.10)。つまり、この設問では、同一回答者が「5年以内続ける」が、「5年後」は「続けたいが続行不能」(従って、「10年後」も「続けたいが続行不能」)というような回答パターンが得られる。

表 3.10 現在の芸術活動を継続するか？(ジャンル別) [複数回答]

継続意思		分野					計 1339人
		演劇 354人	舞踊 169人	美術 80人	音楽 577人	スタッフ 159人	
5年以内	続ける	327	155	78	553	146	1259
5年後も		253	115	73	442	112	995
10年後も		216	94	71	373	85	839
5年以内	変えたい	6	3	0	7	2	18
5年後		8	3	0	13	2	26
10年後		2	5	0	14	3	24
5年以内	続けたいが続けられない	21	12	2	22	10	67
5年後		17	7	1	14	4	43
10年後		17	14	0	43	16	90

70%以上が5年以内も続けると答え、5年後も続ける、10年後も続けると答えた割合も高い。その一方で、5年以内に変える、5年後変えたい、10年後変えたいという者は極めて少ない。5年以内で続けたいが続けられないと答えた者が67人、5年後続けたいが続けられない43人、10年後続けたいが続けられない90人となっているが、これは定年や引退等の年齢的要因の他に、将来の生活設計に対する不安要因もあることを示しているといえる。ジャンル別に見ると、「続けたいが続けられない」と答えた割合が最も大きいのは音楽で、次に大きいのは演劇である。本人収入がもっとも少なかった演劇でこの割合が大きいのは経済的理由と思われるが、比較的収入が多いと思われる音楽でも「続けたいが続けられない」の割合が大きいのはそれ以外の何らかの理由があると思われる。

表3.11では、男女別に、年代別で見ているが、年齢が自分の芸術活動の継続にどれだけ影響を与えているのかをある程度推測することができる。「続けたいが続けられない」を見ると、高齢になるに従って定年・引退等のため、続けることができないという人が増えていくことは自然である一方で、70歳以上でも「10年後も続ける」が相当数あるのは大変心強い感がある。男女別に見ると30代以外は、男女間に目立った差はない。30代の男性では、52人中1人が5年以内に変えたい他は全員が10年後も続ける一方、女性では97人中12人が近い将来続けられないと回答しているが、これは結婚や育児等により、現在の芸術活動を続けることができなくなることを予想していると推測される。

表 3.11 現在の芸術活動を継続するか？（性別および年代別） [複数回答]

男性	現在の芸術活動を	30歳未満	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	計
5年以内	続ける	9	51	139	213	190	111	713
5年後も		9	44	123	185	132	67	560
10年後も		8	44	114	146	107	50	469
5年以内	変えたい	0	1	2	3	0	2	8
5年後		0	0	5	5	2	2	14
10年後		0	0	5	4	1	0	10
5年以内	続けたいが続けられない	0	0	6	5	13	16	40
5年後		0	0	2	2	6	14	24
10年後		0	0	6	21	13	8	48
計		9	52	146	222	203	125	757

女性	現在の芸術活動を	30歳未満	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳以上	計
5年以内	続ける	15	92	144	137	114	43	545
5年後も		12	80	128	115	75	25	435
10年後も		11	79	115	91	55	19	370
5年以内	変えたい	0	2	3	2	3	0	10
5年後		0	3	5	2	2	0	12
10年後		0	2	5	3	4	0	14
5年以内	続けたいが続けられない	0	4	6	5	8	4	27
5年後		0	4	5	5	3	2	19
10年後		0	4	11	15	9	3	42
計		15	97	152	145	124	48	581

4 芸術家のキャリア形成に関する分析

4.1 キャリア形成に関する情報

第4回芸術家調査のA票にあるキャリア形成に関する設問を対象にして、日本の芸術家の家庭環境、周囲の人々からの影響などを分析する。

個人情報としては、①芸術ジャンル、②性別、③生年、④現住地、⑤出生地、⑥続柄がある。関係する調査項目としては、次の4点を取り上げた。

- ①家族について (a)配偶者、(b)子供、(c)両親、(d)祖父母
- ②影響を受けた人 ③過去の職業活動の種類と年数 ④海外生活経験

4.2 調査回答者の概要

ジャンル別では、A票の回答者は音楽が46.6%を占め、次いで演劇の24.0%、舞踊の12.6%、舞踊の12.6%、スタッフの11.5%と続く(既出表2.4と表2.5参照)。性別では男性が54%、女性は46%であり男女の比率はあまり変わらない。年齢分布(表4.1)を見ると、30代~60代の人が多く、全体の平均年齢は54.2歳と少し高めである。これは、この芸術調査では年収などを記入する部分があるため、生活が安定している人や、時間的に余裕がある人の回答率が高くなってしまふからだと思われる。またジャンル別に平均年齢を見てみると舞踊のジャンルの平均年齢だけが58.8歳と高くなっており、残りの4つのジャンルは54歳に達しない。更に男女別に見ていくと、女性では年齢が30~60代に集中し、男性と比べると舞踊のジャンルの割合が特に多い。

男性では 40～70 代の人が多く、女性より年齢層が高いと言える。ジャンル別では音楽と演劇の割合が多い。スタッフの大部分は演劇関係者である。

表 4.1 年齢・分野の分布

性別	年齢	演劇	舞踊	美術	音楽	スタッフ	計	割合
男性	年齢不明	0	1	0	0	1	2	0%
	20歳代	0	1	0	1	2	4	1%
	30歳代	7	0	3	15	4	29	7%
	40歳代	26	4	8	30	21	89	21%
	50歳代	33	7	15	54	20	129	30%
	60歳代	23	6	9	50	17	105	25%
	70歳代	23	8	0	21	11	63	15%
	80歳代	0	0	0	1	0	1	0%
	90歳代	0	0	0	1	0	1	0%
	計	112	27	35	173	76	423	100%
割合		26%	6%	8%	41%	18%	100%	
女性	年齢不明	1	1	0	2	0	4	1%
	20歳代	4	1	0	1	0	6	2%
	30歳代	23	7	1	31	4	66	18%
	40歳代	14	11	1	68	5	99	28%
	50歳代	10	10	2	50	5	77	21%
	60歳代	20	30	2	24	0	76	21%
	70歳代	4	9	0	13	0	26	7%
	80歳代	0	3	0	2	0	5	1%
	90歳代	0	0	0	1	0	1	0%
	計	76	72	0	192	14	360	100%
割合		21%	20%	0%	53%	4%	100%	
男女	計	188	99	41	365	90	783	
	割合		24%	13%	5%	47%	11%	100%

ジャンルによっては世襲の度合いが高いかもしれないと考え、続柄を見てみると、女性の場合長女である場合が多く、養女であると答えた人は1人しかいない。反対に男性の場合、ジャンルによっては長男以外と答えた人の方が多いこともある。

現住地や出生地を見てみると、出生地は、東京が 31.4%と最も多く、次が九州の 12.5%である。そして現在の主な活動状況を示す現住地は東京が 50.1%、神奈川が 11.5%、関東（東京・神奈川除く）が 10.7%、近畿（大阪・京都除く）が 5.0%である。これをジャンル別に見てみると、演劇 72.9%、舞踊 50.5%で、美術以外の他のジャンルでも 40%以上が東京に住んでいる。スタッフは詳しい仕事内容が音響や照明などであり、ほとんどが演劇ジャンルに属するので、演劇のジャンルでは東京での仕事が多いことがわかる。音楽の東京在住の割合も 5割弱位だが、残りの半分では、舞踊が北海道・東北に比較的多く分布している。それに対して、音楽は関東や近畿などの都市圏に多く分布している。東京在住者が最も少ないのは美術のジャンルで 17.1%で、これは神奈川県在住者の 24.4%よりも少ない。つまり、美術家は他の地域にも広く分散しているということで、活動場所が限定されていないといえる。（論文末尾の付表 1）

次に、出生地と現住地との関係を見ると、関東出身者の 9割以上が関東に在住しており、他地域の出身者も近畿、東海出身者を除き 6割以上の人が関東に居住している。近畿出身者は、東京在住率が 43%、近畿在住率が 47%であり、関東への居住率は他の地域在住者よりは低い。

次にそれ以外の項目について見ると、現在結婚している人は 68.9%、死別・離婚で現在独身は 14%、子供がいる人は 69.4%である。これは回答者の年齢層が高いことと関係しているようである。（論文末尾の付表 2）

4.3 芸術家の家系

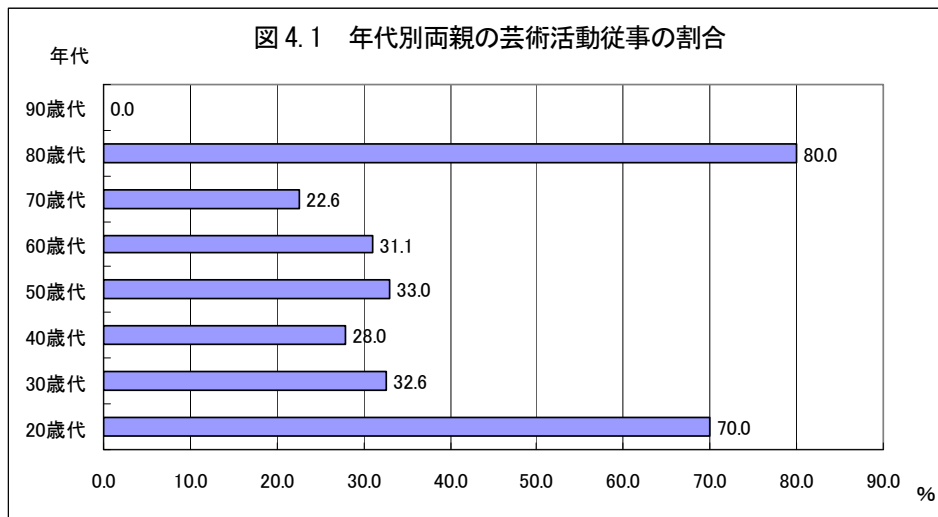
本節では、祖父母から子供に至るまでの四世代について、芸術活動への従事の状態を見ることによって、芸術家がどのような家庭環境の中で形成されるかを分析する。ここで、芸術家のような特別な職業に就こうとする場合、家系ないしは家庭環境の影響が大きいと予想される。さらに、性別で見た場合、両親・祖父母では、同性(女性は母親・祖母、男性は父親・祖父)の影響が大きいと思われる。また、回答者のジャンル別では、世襲的な舞踊、特に日舞において家系の影響が大きいものに対して、演劇は本人の個性や素質に依るところが大きいいため、家系の影響がほとんどないと推測される。

両親の芸術活動への従事

設問「父親が芸術活動に従事していたか」の有効回答者数 706 名のうち父親が芸術活動に従事していた(している、以下同じ)者は12%、母親が芸術活動に従事していた者は12.8%であり、両親の双方あるいはいずれかが芸術活動に従事していた者は19.8%である。

これを回答者の性別で見ると、女性芸術家の場合、父親よりも母親の方が芸術活動をしてきた割合が大きい(10%対 15%)のに対して、男性芸術家の場合は父親が芸術活動をしてきた割合の方が大きい(14%対 10%)ことが特徴である。つまり女性の場合は父親よりも母親の影響を大きく受けているのに対し、男性の場合は父親からの影響の方が大きい傾向がある。

年代別に見ると、回答数が少ない20代と80歳以上を除けば、どの年代でもほぼ同じような比率を示している。(図 4.1)



ジャンル別に見ると、両親が芸術活動に従事していた者の比率は舞踊(33%)、音楽(22.1%)、スタッフ(20.9%)の順に高く、演劇(10.4%)、美術(9.8%)の比率は他に比べて低い。男女別では、女性の場合、舞踊(28.4%)、音楽(24.0%)、スタッフ(28.6%)の順に高く、男性の場合は舞踊(45.8%)、音楽(20%)、スタッフ(19.4%)の順になっている。美術、音楽、舞踊の中でさらに詳細ジャンル別に見てみると、音楽の中では作曲(29.7%)、弦楽器(29.6%)、鍵盤楽器(27.6%)、舞踊では日舞(42.3%)、現代舞踊(40.9%)、振り付け師(37.5%)において両親が芸術活動に従事している割合が大きいのが特徴といえる。両親が自分と同じジャンルの芸術活動をしていたかを見ると、舞踊が24.2%で群を抜き、次いで音楽の10.3%が続く。

祖父母の芸術活動への従事

それでは更にもう一世代前の祖父母にまで遡るとどうなるか。回答者全体では「祖父母」（祖父母いずれか、または両方を意味する）が芸術活動に従事していた者は約1割（747人中80人）で、両親の場合と較べると明らかに芸術活動に従事していない割合は大きい。これは男女別で見ても、際立った特徴はない。

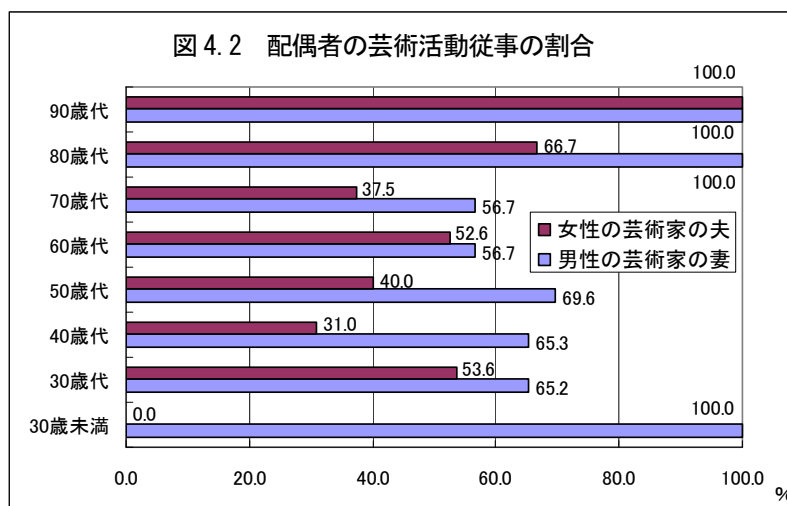
ジャンル別に見ると、祖父母が芸術活動に従事していた者の比率は舞踊（18.5%）が1番高く、次にスタッフ（17.0%）、美術（15.0%）であり、演劇、音楽の比率は他に比べて低い。男女別では、女性の場合、スタッフ（50%）、美術（16.7%）、舞踊（13.4%）の順に祖父母が芸術活動をしていた比率が高い。男性の場合は舞踊（32%）が圧倒的に高く、次いで美術（14.7%）となっており、以下、スタッフ（10.8%）、音楽（8%）、演劇（6.4%）と続く。

音楽と舞踊をさらに詳細ジャンル別に見ると、祖父母が芸術活動に従事していた割合が大きいのは、音楽では、作曲37人中5人（13.5%）、弦楽器53人中7人（13.2%）、鍵盤楽器85人中7人で（8.2%）、舞踊では、プリマ13人中4人（30.8%）、「その他の舞踊」10人中3人（30%）、日舞27人中6人（22.2%）が目立っている。

配偶者の芸術活動への従事

A票の「結婚の有無」の設問では、①結婚したことがない②現在配偶者がいる③独身（死別）④独身（離別）をたずねている。有効回答者数は755名で、そのうち68.9%が現在結婚しており、性別では女性は52%、男性は83%と圧倒的に男性の方が結婚している割合が大きい。離別して現在独身の者の割合は、男性よりも女性の方が大きく、50代から60代に多く見られる。また、今の配偶者も芸術活動に従事している割合は男性回答者が63.2%に対して、女性回答者は41.9%で、少し開きがあるが、男女あわせると54.9%になり、約半分の回答者の配偶者が何らかの芸術活動をしていることになる。

図4.2に配偶者が芸術活動に従事の割合を年代別・性別で示している。40代、50代の男女間で配偶者が芸術活動に従事している比率が大きく異なっている。これは、この年代において女性の芸術家の夫が芸術以外の仕事に就いているケースが多いことを意味しているが、これを説明することはこのデータだけでは難しい。



ジャンル別では、配偶者が芸術活動に従事している回答者338名の内訳は、美術18人（同ジャンルの有効回答者の50%）、音楽147人（同49.3%）、演劇89人（同61.8%）、舞踊37人（同57.8%）、スタッフ47人（同63.5%）である。男女別では、女性の芸術家の場合、演劇（72.3%）、美術（50.0%）、舞踊（46.5%）、スタッフ（33.3%）、音楽（30.5%）の順に夫が芸術活動に従事している比率が高く、男性の芸術家の妻が芸術活動に従事している割合は、舞踊（81.0%）、音楽（66.2%）、

スタッフ (66.2%)、美術 (50.0%) の順に高くなっている。

子供の芸術活動への従事

回答者の職業として行っている芸術活動は、子供が職業として芸術活動の選択をするのにどのような影響を与えているのだろうか。設問「子供の有無」の有効回答者数 641 名のうち約 7 割 (440 人) の者に子供がおり、子供と同居している者の割合 (37.9%) は別居している者の割合 (22.3%) を上まわっている。仕事をしている子供がいる者は全体の約 6 割を占め、そのうちの 36.5% の回答者の子供が芸術活動に従事していることから比較的親の影響を受けているといえる。自分と同じジャンルの芸術活動をしている子供がいる者は 94 人 (430 人中)。後継者を志すかどうかの質問に対しては、「自分の後継者になる・志している」子供のいる者は 50 人、「現時点で不明」が 139 人にのぼった。

ジャンル別に見ると、自分の子供が芸術活動に従事している比率は、舞踊 (63.0%)、美術 (42.9%)、スタッフ (39.6%)、演劇 (32.0%)、音楽 (31.5%) の順になっている。男女別に見ると、女性芸術家の場合、舞踊 (53.3%)、演劇 (29.6%)、音楽 (23.9%) の順に、男性芸術家の場合、舞踊 (81.3%)、美術 (50.0%)、スタッフ (39.2%)、音楽 (37.2%)、演劇 (32.9%) の順に芸術活動に従事している子供を持っている比率が高い。前述のように、舞踊家は親や祖父母にも芸術活動従事者が多く、これは世襲的な日本舞踊が含まれていることが影響していると思われる。また、舞踊では、家族の中で芸術活動に従事している者が両親、祖父母、子供に多いのに対して、演劇の場合は配偶者を除いて芸術活動従事者の割合が低くなっている。これは、舞踊は家系が職業選択に与える影響が他のジャンルに比べて大きいのに対して、演劇では家系の影響がそれほど強くないためと思われる。

家族全体の芸術活動への従事

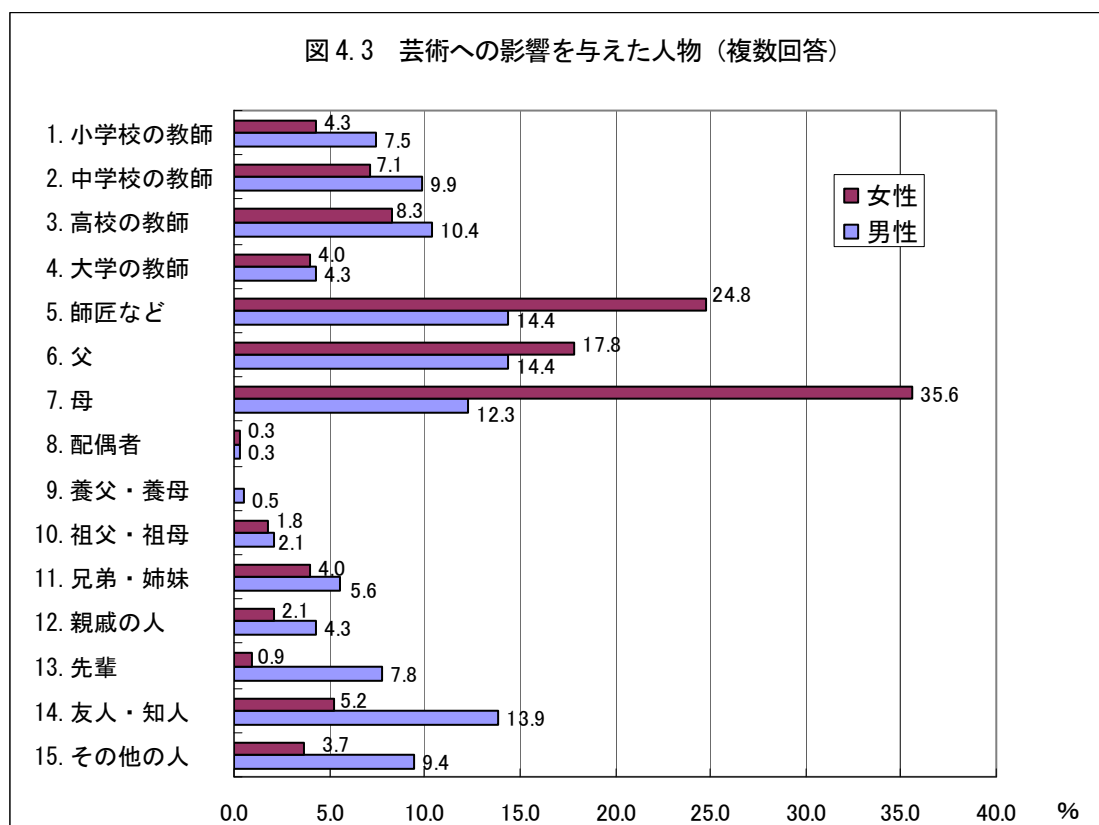
これまでの議論をふまえて家系三世代 (両親・芸術家本人・子供) あるいは四世代 (祖父母・両親・芸術家本人・子供) にわたる芸術活動従事者の状況を見てみる。家系三世代で見た場合、芸術家本人の親が芸術家である場合、自分の子供は 45.6% が芸術活動に従事しており、そうでない場合には、子供が芸術活動に従事する比率は 36.5% に下がっている。子供が後を継ぐかどうかは、自分の両親と本人の二世代続けて芸術活動をしている場合、子供は 16% が後継者を志しており、本人のみの一世代の場合はその比率が 6.6% に落ちる。また家系四世代の場合、祖父母のいずれかが芸術家である回答者の子供は 54.5% が芸術活動に従事しており、祖父母が芸術家でない回答者の子供のその比率は 34% になる。このように祖父母、あるいは親の代から芸術活動に従事している家系では、子供の芸術活動従事、後継者の比率も増加しており、家系の影響があるといえる。

ジャンル別に見ると、家系三世代の場合、回答者本人の子供、および両親がともに芸術活動をしている者の割合は、舞踊 (21.7%) が一番大きく、次に美術 (9.5%)、スタッフ (9.4%)、音楽 (7.0%)、演劇 (4.1%) の順になっている。家系四世代の場合、本人の祖父母・親・子供がいずれも芸術活動をしている者の割合は、舞踊 (10.9%)、演劇 (3.1%)、スタッフ (1.9%)、音楽 (1.4%) の順である。美術では回答者が少ないせいもあるが、本人の祖父母、親、子供ともに芸術活動をしている者はいなかった。このように他のジャンルに比べ舞踊では、特に家系が職業選択に対して影響を与えていると思われる。

子供が芸術活動に従事しているかどうかを、配偶者の芸術活動への従事との関係で見ると、夫婦ともに芸術家の場合は 38.4%、回答者のみが芸術家の場合は 33.3%で、前者の方がわずかであるが高くなっている。それをさらに男女別で見ると、女性芸術家の場合は、夫婦ともに芸術家の場合 36.7%、妻本人のみが芸術家の場合 26.0%で、男性芸術家の場合、夫婦ともに芸術家の場合 38.9%、夫本人のみが芸術家の場合 40.2%という結果が出ている。

4.4 影響を受けた人

人間の成長の過程でその進路の決定には他の人物の影響が大きいといわれる。特に芸術家のように特殊な技能や才能が要求される職業に就こうとする時は、それが大きいものと予想される。そこで、小・中・高等学校・大学の教師および個人的についた先生、父・母・配偶者・養父母・祖父母・兄弟姉妹・親戚等の家族的つながりを持つ人、先輩・友人・知人等、その他の人間的なつながりをもつ人など 15 の人間関係のカテゴリーの中から、現在の道を選ぶに当たって、最も影響を受けた人物はだれかを尋ねた。(図 4.3)



その結果、父母や師匠をあげた人が特に多く、それぞれ全体の約 2 割の人が回答している。また本人との関係で見ると、中学校の教師や高校の教師や友人・知人から影響を受けたという人がそれぞれ 1 割近くいるが、両親以外の親戚や先輩など、それ以外の関係の人を回答した人は少なかった。

これを性別で見ると、「学校の教師」と回答した人の割合は、小学校・中学校・高校のどれをとっても男性芸術家の方が多いが、同じ先生でも「師匠」と回答した人の割合は女性芸術家の方が大きい。また両親の芸術活動で、男性は父親、女性は母親のあとを継いでいる場合が多いとい

う結果が出ていたが、男性で父親の影響を受けたと回答した人の割合(14.4%)は女性(17.8%)と比べると意外にも低く、男性の回答の中では父親の影響が最も多いという結果が出たにもかかわらず、女性の割合と比べた場合若干少なかった。しかし父母から影響を受けたと回答した人(男 100 人、女 178 人)の両親が芸術活動をしていたかを見ると、同ジャンルの芸術活動をしていた人は意外に少なく、父親では芸術以外の職業、母親では仕事をしていない人が多いという結果が出た。つまり、影響を受けたからといって父母が同ジャンルの芸術活動をしていたとは限らないと言える。男女間の最も大きな違いは、女性では師匠・父・母と回答した人が多く、全体の6割にもものぼる。一方、男性の場合には特に多い回答はなく、友人・知人やその他の人物を含めいろいろな人から影響を受けていると言える。

ジャンル別に見ると、学校の教師の影響を最も多く挙げているのは美術で、その中でも高校の教師を挙げている人が多い。教師の影響が少ないのは、舞踊である。これは、義務教育などで音楽や美術の授業はあるが、舞踊の授業はないことに関係していると考えられる。演劇やスタッフのジャンルでは父母の影響が低く、逆に友人・知人の影響が最も大きい。これは「両親の芸術活動」を尋ねたとき、演劇・スタッフのジャンルでは親のあとを継いでいる人が少なかったことと、演劇は自分一人では芸術として完結しないので、友人・知人等と一緒にその道を進んでいることが多いからだと思われる。舞踊・音楽では師匠や父母の影響が大きいですが、父親よりも母親の影響を受けた人が多かった。これは母親が「おけいごと」を子供の幼少時に勧めているということなのだろうか。

5 4つの調査時点毎の芸術家の年齢と年収の分布

5.1 分析対象の個票

先に、2.4節で述べたように、第1回から第4回まで連続の継続調査対象者は、第1回A票、第2回B票、第3回A票、第4回B票を配布したグループと、第1回B票、第2回A票、第3回B票、第4回A票を配布したグループの二つのグループに分けられる。従って、この二つのグループに基本属性を用いてマッチングを施すことによって個票レベルで4時点のファイルをリンクすることが可能になり、実態に近い擬似パネルデータが編成できる。

5.2 パネルデータ編成のもとになったオリジナル・ファイルにおける芸術家の年収

ここではすべてのジャンルの芸術家の年収について、計算を行った。表5.1と図5.1~5.4に、第1回~第4回の①芸術家本人の年収、②そのうちの定期収入分、③家族全体の年収について、それぞれ男女別、年代別、ジャンル別に示している。

ここで収入額について、若干の注釈を入れておきたい。個票の記入状況では、収入の項目は年収、定期収入、家族収入の三つともすべてが埋められていないパターンが多く、また、この三つの種類の年収額の値が論理的に矛盾している場合が多かったので、以下の表で示すような補正(imputation)を行った。ただし、補正前の値も残すために、補正前と補正後のsas変数名を別にして示している。たとえば、年収は補正前はyr_income、補正後はyincomeというsas変数を使っている。

sas変数名	年間収入	定期収入	世帯収入	修正 ⇒	年間収入	定期収入	世帯収入
	yr income	rg income	fam income		yincome	rgincome	fam incm
		A			A	A	A
A > Bのとき	A				A		A
A < Bのとき		A	A		A		A
	B				注1 参照		
			A		B		B

個票の記入状況
補正後

※斜線は欠損値、A,Bは記入のあった収入額

注1：記入された定期収入が年収より大きい時は、年収と定期収入の入れ替える。ただし、年収と定期収入の合計が世帯収入に等しいときは、定期収入はそのままにして年収を世帯収入で置き換える。

表 5.1 に 4 時点それぞれの個票データから、本人年収、定期収入分、家族全員の年収合計の平均額を、男女別、ジャンル別、年代別に示しているが、本章で平均値を計算するに当たって、本人収入や家族収入があまりに大きい場合はあえて計算から外している。具体的には、年収や家族収入が 1 億円以上の個票は計算対象外とした。なお、年齢は当該調査年の年末現在の年齢である。この表から、演劇、舞踊、音楽の 3 つのジャンルについて、第 1 回から第 4 回調査までの本人の年収と家族の年収の平均額を、年代別にそれぞれ図 5.1 と図 5.2 で比較をした。ただし、ジャンルによっては特定の年代のサンプル数が少なく、金額が突出しているケースがあり、また、30 歳未満と 70 代以上のサンプル数は限られているので、注意が必要である。

これまでに芸術家調査が実施された 4 時点における日本の経済状況を振り返ると、第 1 回調査の 1986 年はバブル経済の初期で景気が勢い良く上を向いていた時期、第 2 回調査の 1991 年はバブル経済がはじける前後で日本経済がピークの段階、第 3 回調査の 1996 年はバブルがはじけ大不況の真っただ中であつた。第 4 回調査の 2001 年ではバブル崩壊後、ほぼ 10 年経過し、平成の大不況といわれた 1996 年ごろよりさらに景気は低迷した。バブルの時は、経済界も景気が良く、芸術を支援するメセナという言葉も大いにもてはやされた。芸術家はその職業柄、その時々々の経済の波をもろに受けるとよく言われるが、図 5.1 と図 5.2 に示した年代別の芸術家本人の年収とその家族収入の平均値を見ても、それぞれの調査時点における経済情勢が明瞭に反映されている。86 年から 91 年にかけては、ジャンルの如何に関わらず、ほとんどの年代で本人も家族全体も年収が大幅に上昇している。逆に、91 年から 96 年にかけては急激な減少傾向にあり、年代によっては 86 年の水準をも下回っている。

図 5.3 と図 5.4 にはジャンル別の芸術家本人の年収とその家族収入の平均値を図示した。本人年収で見ると、演劇界はバブル崩壊の影響を受けていないように見えるが、先の年代別を参照すれば、40～50 代の中堅層の年収が 100 万円ほど減少している。舞踊はどの世代でも減少傾向を示している。音楽は 30～50 代がバブル以前の水準より上で踏みとどまっている。家族収入では、どのジャンルもバブル崩壊前後でそれほどの変化がないように見えるが、演劇の 40～60 代が 100 万円ほど減少している。この 40～50 代は本人の年収の減額分が家族収入の減収につながっていると考えられる。演劇の 60 代は、本人収入が 50 万円ほど上昇しているにもかかわらず、家族収入でほぼ同額減少している。これは、他の家族の収入が 100 万円減少したことを意味するが、家族収入が 1000 万円前後と比較的高い収入層であることを考慮すれば、誤差の範囲内と見なすこともできるかもしれない。3 つのジャンルの中で演劇が 4 時点とも家族収入が 700 万円代で、舞踊と音楽の 1000 万円前後と比べると明らかに低いのだが、本人収入で見ると、演劇は舞踊より収入が高いと考えられる。これは、舞踊では女性が多く（表 5.2）、その配偶者である夫の収入の高さが演劇との家族収入の逆転現象を引き起こしているためと推測される。

表 5.1 芸術家の平均年収額（世帯収入が1億円以上を含まず）

第1回(1986年)				第2回(1991年)				第3回(1996年)				第4回(2001年)			
	定期	本人	世帯		定期	本人	世帯		定期	本人	世帯		定期	本人	世帯
男性	434	629	782	男性	544	752	937	男性	535	711	895	男性	530	730	900
女性	331	442	839	女性	352	450	931	女性	355	434	889	女性	308	456	835

ジャンル	年代	定期	本人	世帯	ジャンル	年代	定期	本人	世帯	ジャンル	年代	定期	本人	世帯	ジャンル	年代	定期	本人	世帯
三ジャンル	30歳未満	291	339	739	四ジャンル	30歳未満	240	343	847	五ジャンル	30歳未満	316	366	763	六ジャンル	30歳未満	360	466	907
	30歳代	290	378	618		30歳代	282	385	728		30歳代	317	433	725		30歳代	217	357	647
	40歳代	413	558	785		40歳代	447	614	931		40歳代	440	568	922		40歳代	397	543	864
	50歳代	504	724	944		50歳代	629	781	1101		50歳代	612	698	1016		50歳代	531	689	959
	60歳代	468	774	973		60歳代	539	758	1008		60歳代	553	749	975		60歳代	526	703	923
70歳以上	379	736	952	70歳以上	442	662	828	70歳以上	393	563	723	70歳以上	378	650	779				
全体	393	554	804	全体	473	636	935	全体	478	617	893	全体	444	615	873				
演劇	30歳未満	229	315	445	演劇	30歳未満	197	195	470	演劇	30歳未満	197	307	573	演劇	30歳未満	150	171	307
	30歳代	210	325	493		30歳代	208	296	556		30歳代	197	307	573		30歳代	122	254	520
	40歳代	336	483	624		40歳代	404	516	747		40歳代	330	380	592		40歳代	302	371	641
	50歳代	454	671	828		50歳代	512	667	868		50歳代	416	575	829		50歳代	323	470	681
	60歳代	341	689	826		60歳代	542	742	960		60歳代	357	713	910		60歳代	257	441	594
70歳以上	237	467	643	70歳以上	467	631	807	70歳以上	281	928	1028	70歳以上	370	532	627				
全体	339	526	680	全体	441	575	797	全体	326	537	757	全体	280	416	614				
舞踊	30歳未満	214	334	454	舞踊	30歳未満	237	276	845	舞踊	30歳未満	270	271	791	舞踊	30歳未満	425	710	968
	30歳代	276	342	693		30歳代	263	300	763		30歳代	316	315	653		30歳代	194	243	572
	40歳代	405	564	856		40歳代	337	462	874		40歳代	285	404	1078		40歳代	252	437	837
	50歳代	475	688	959		50歳代	487	617	982		50歳代	428	546	1053		50歳代	466	669	962
	60歳代	392	488	844		60歳代	610	793	1062		60歳代	649	810	1064		60歳代	414	594	821
70歳以上	265	856	1160	70歳以上	476	558	731	70歳以上	329	545	740	70歳以上	364	868	991				
全体	393	600	898	全体	365	454	877	全体	384	471	909	全体	383	627	878				
音楽	30歳未満	295	332	768	音楽	30歳未満	268	552	1012	音楽	30歳未満	333	417	802	音楽	30歳未満	357	511	1223
	30歳代	322	401	659		30歳代	318	467	771		30歳代	347	499	823		30歳代	280	441	771
	40歳代	441	582	837		40歳代	481	666	1016		40歳代	459	626	1013		40歳代	411	563	949
	50歳代	538	761	1021		50歳代	770	896	1321		50歳代	795	893	1297		50歳代	618	770	1091
	60歳代	563	944	1146		60歳代	697	908	1230		60歳代	740	943	1234		60歳代	758	963	1223
70歳以上	490	784	982	70歳以上	698	892	1065	70歳以上	360	536	741	70歳以上	386	687	850				
全体	408	547	836	全体	554	714	1064	全体	554	691	1044	全体	542	710	1025				
(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)							
美術	30歳未満	209	364	532	美術	30歳未満	387	710	828	美術	30歳未満	358	489	730	美術	30歳未満	372	512	732
	30歳代	534	781	964		30歳代	624	810	1080		30歳代	540	668	931		30歳代	639	918	1082
	40歳代	457	691	917		40歳代	457	691	917		40歳代	586	653	914		40歳代	614	892	1002
	50歳代	393	636	800		50歳代	457	691	917		50歳代	513	678	885		50歳代	486	679	903
	60歳代	475	705	916		60歳代	393	636	800		60歳代	407	554	709		60歳代	467	623	874
70歳以上	475	705	916	70歳以上	475	705	916	70歳以上	493	630	840	70歳以上	568	824	980				
全体	475	705	916	全体	475	705	916	全体	493	630	840	全体	568	824	980				
(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)							
スタッフ	30歳未満	229	233	366	スタッフ	30歳未満	359	473	609	スタッフ	30歳未満	448	558	746	スタッフ	30歳未満	550	725	1750
	30歳代	359	473	609		30歳代	448	558	746		30歳代	208	367	550		30歳代	208	367	550
	40歳代	448	558	746		40歳代	330	456	667		40歳代	470	648	873		40歳代	470	648	873
	50歳代	330	456	667		50歳代	613	876	1117		50歳代	580	688	1013		50歳代	580	688	1013
	60歳代	224	329	560		60歳代	224	329	560		60歳代	490	654	903		60歳代	490	654	903
70歳以上	437	580	772	70歳以上	437	580	772	70歳以上	437	580	772	70歳以上	467	623	874				
全体	437	580	772	全体	437	580	772	全体	437	580	772	全体	467	623	874				
(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)				(単位:万円)							

本人：芸術家本人の年収の平均額
 定期：本人収入のうちの定期的収入額
 世帯：本人収入を含む家族全体の年収額

表 5.2 ジャンル別回答者数

回	ジャンル	男	女	合計
第一回	演劇	417	119	540
	舞踊	76	150	227
	音楽	725	531	1259
第二回	演劇	403	160	567
	舞踊	112	633	748
	美術	938	151	1104
第三回	音楽	619	481	1108
	演劇	220	121	341
	舞踊	42	274	316
第四回	美術	969	232	1201
	音楽	445	329	774
	スタッフ	104	10	114
第一回	演劇	226	134	360
	舞踊	45	129	174
	美術	71	11	82
第二回	音楽	286	304	591
	スタッフ	138	22	160

【注】本表では、第3回と第4回調査の「演劇」、「舞踊」、「音楽」の3ジャンルから「スタッフ」を更に分離しているが、その大部分は「演劇」である

芸術家の経済的自立度を図る尺度として、本人収入が自分の家族収入に占める割合を計測した。図 5.5(男女)、図 5.6(男)、図 5.7(女)には、本人年収の家族全体の年収に占める割合が8割を超える芸術家の年齢分布を示す。この分布を見る限りは、4時点とも異なる様相を呈していて、合理的な説明が困難であるが、回答者の年齢分布が4時点で異なることが一つ考えられる。更にこの尺度はその時の経済情勢と関係していて、4時点で必ずしも同じ傾向を示すとは限らないのかもしれない。いずれにしても、今一度別の切り口から構造分析する必要がある。自立度とは逆に、家族への経済的依存度を図る尺度として、本人年収の家族全体の年収に占める割合が4割未満の芸術家の年齢分布を図 5.8(男女)、図 5.9(男)、図 5.10(女)に示すが、男女間で明らかな違いがある。男性は比較的なだらかな分布である一方、女性は30~40代で大きな山がある。参考のために調査回答者の年齢分布を図 5.11(男女)、図 5.12(男)、図 5.13(女)に示す。

図5.1 第1回から第4回調査の本人年収の比較：年代別

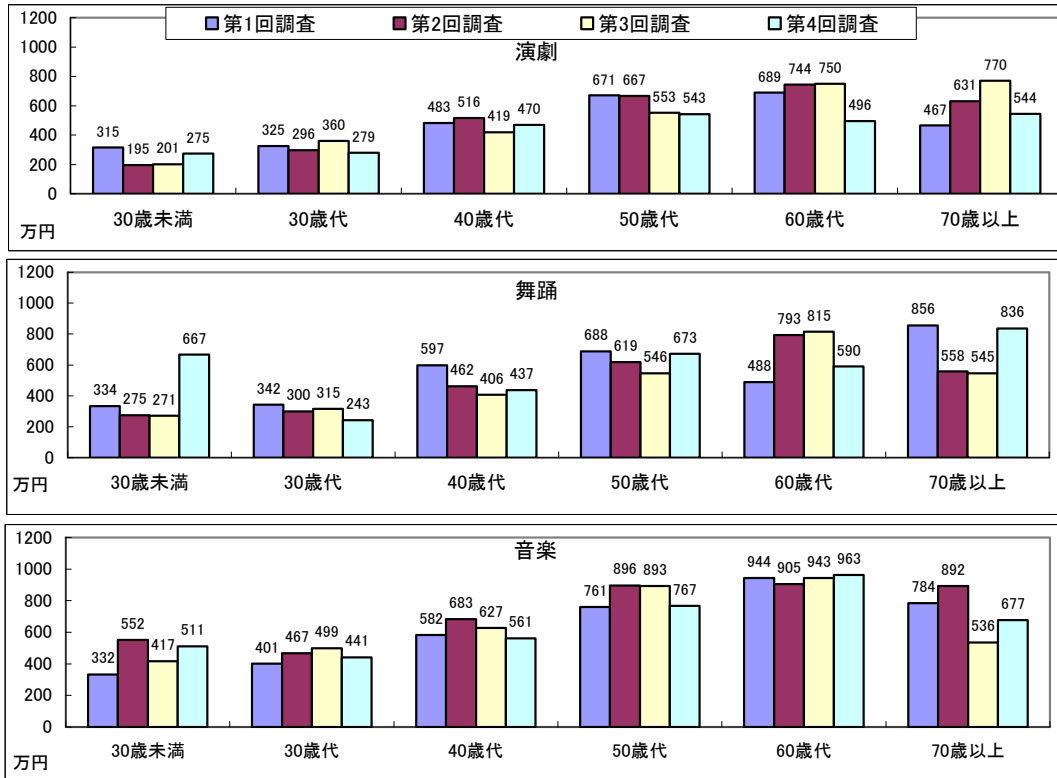


図5.2 第1回から第4回調査の家族年収の比較：年代別

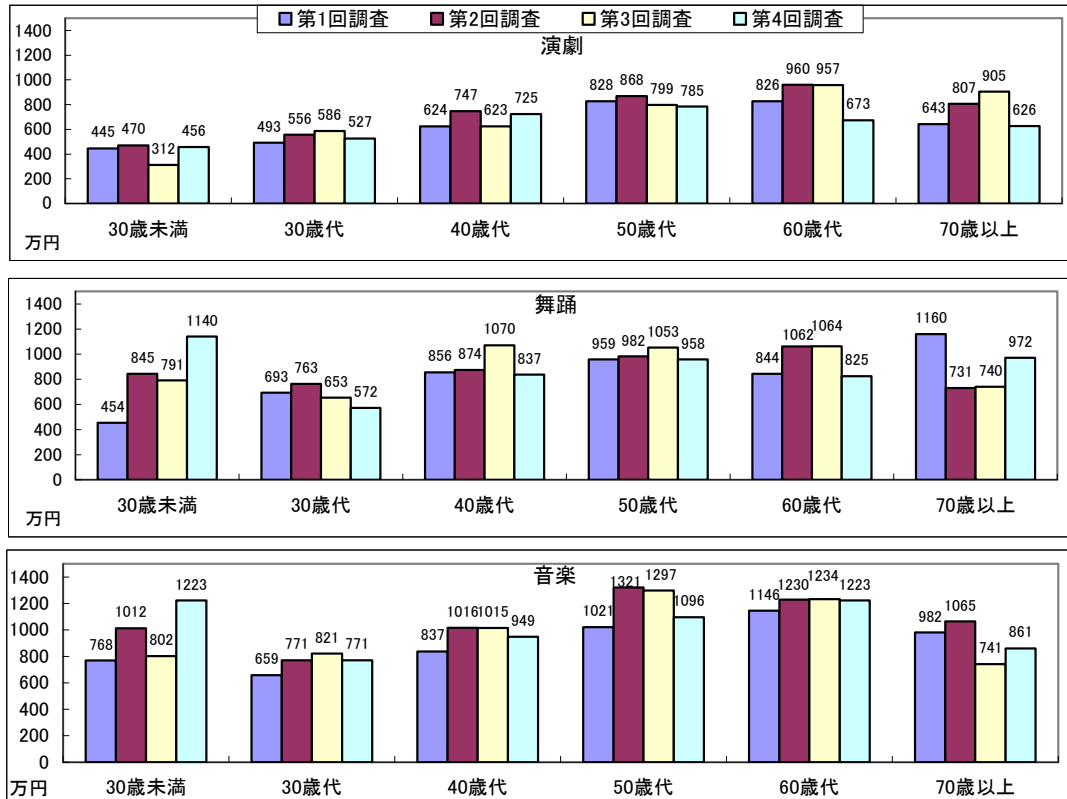


図 5.3 第 1 回から第 4 回の本人収入の比較：ジャンル別

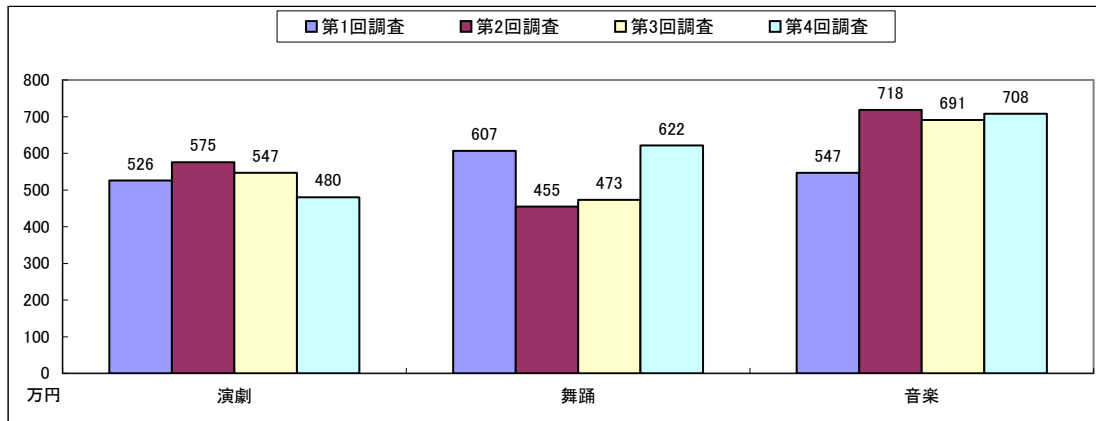


図 5.4 第 1 回から第 4 回の世帯収入の比較：ジャンル別

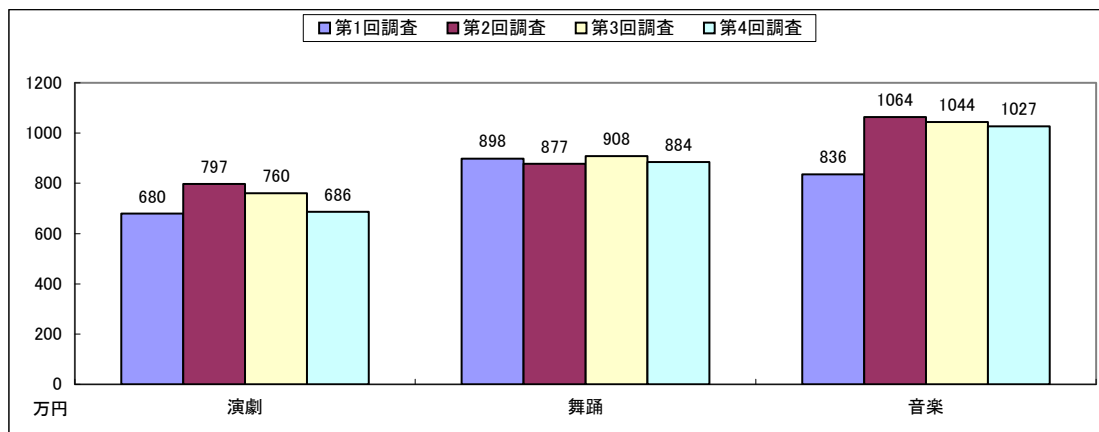


図 5.5 本人収入が家族収入の8割以上の芸術家（男女）

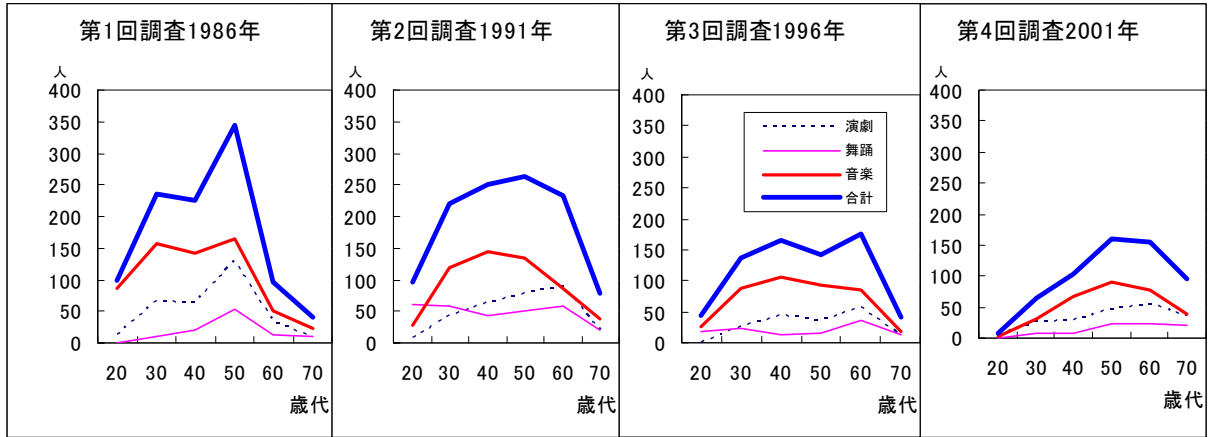


図 5.6 本人収入が家族収入の8割以上の芸術家（男）

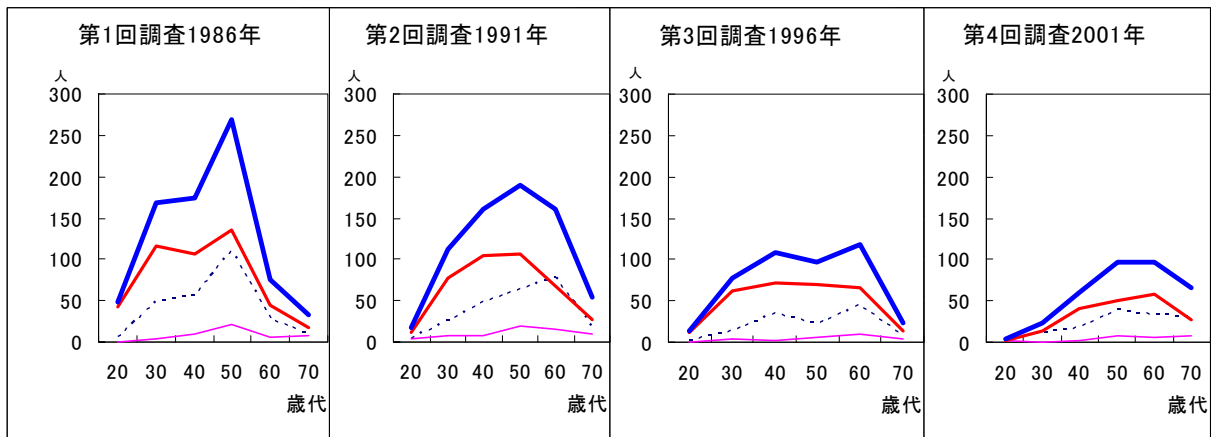


図 5.7 本人収入が家族収入の8割以上の芸術家（女）

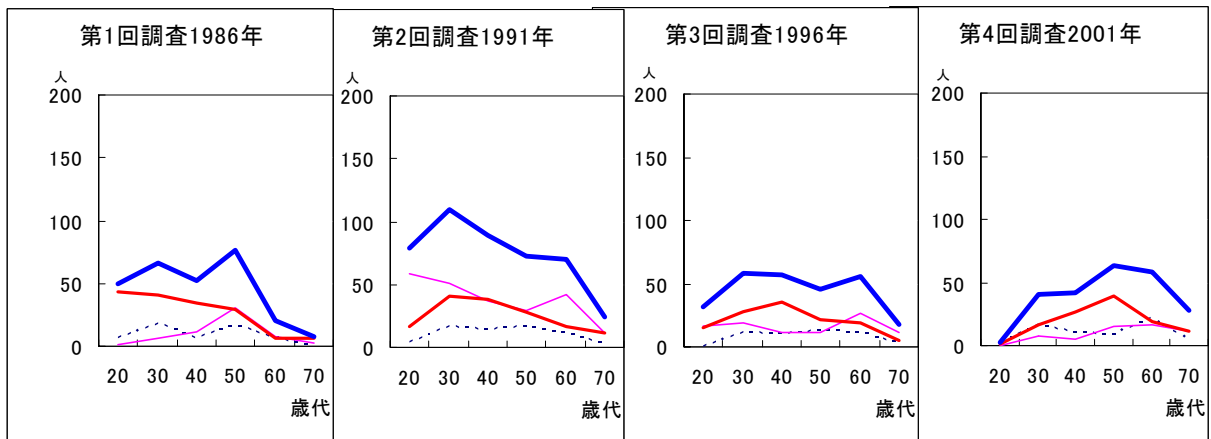


図 5.8 本人収入が家族収入の4割以下の芸術家（男女）

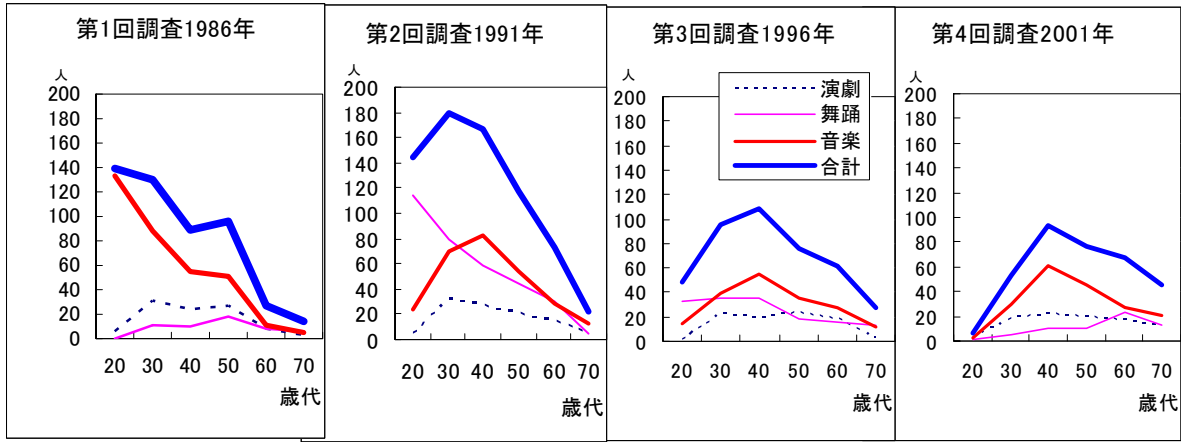


図 5.9 本人収入が家族収入の4割以下の芸術家（男）

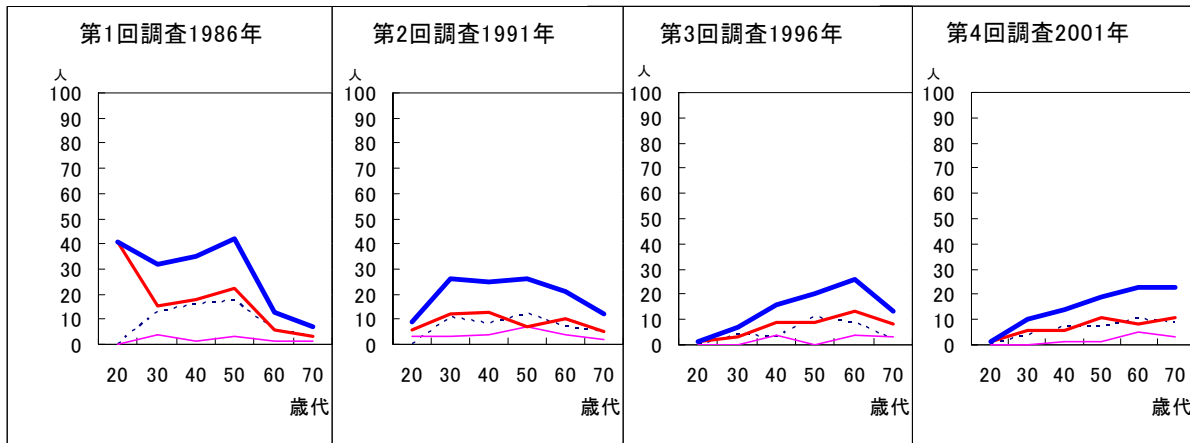


図 5.10 本人収入が家族収入の4割以下の芸術家（女）

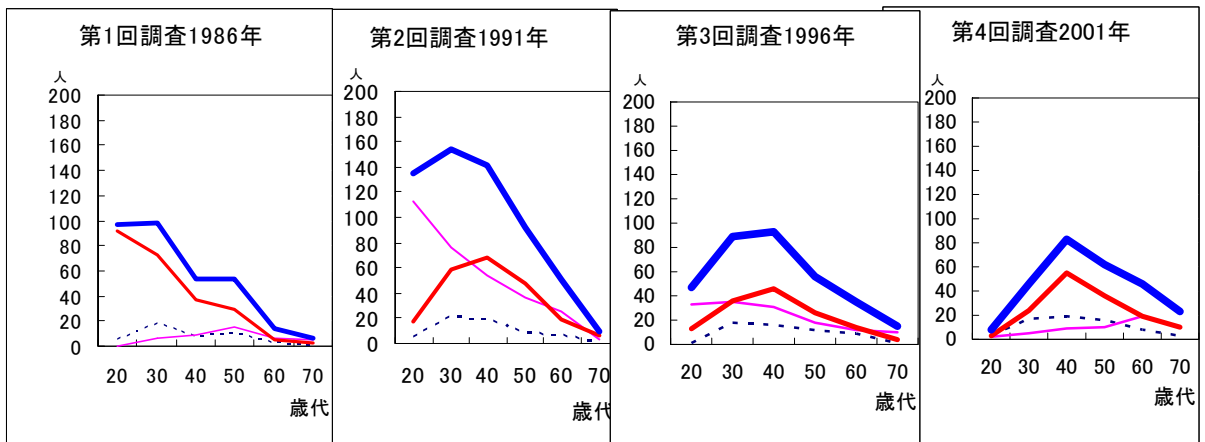


図 5.11 全調査回答者のジャンル別年齢分布（10歳刻み）

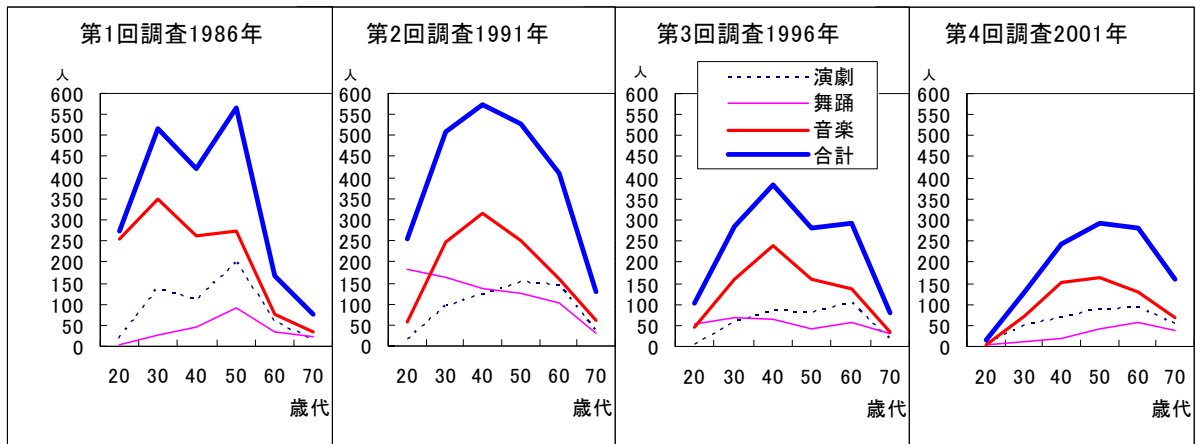


図 5.12 男性の回答者のジャンル別年齢分布（10歳刻み）

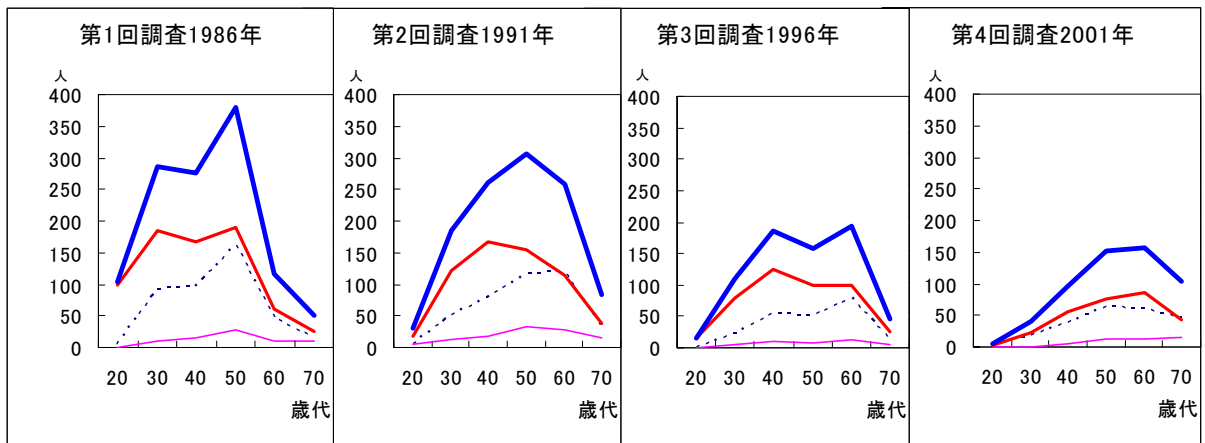
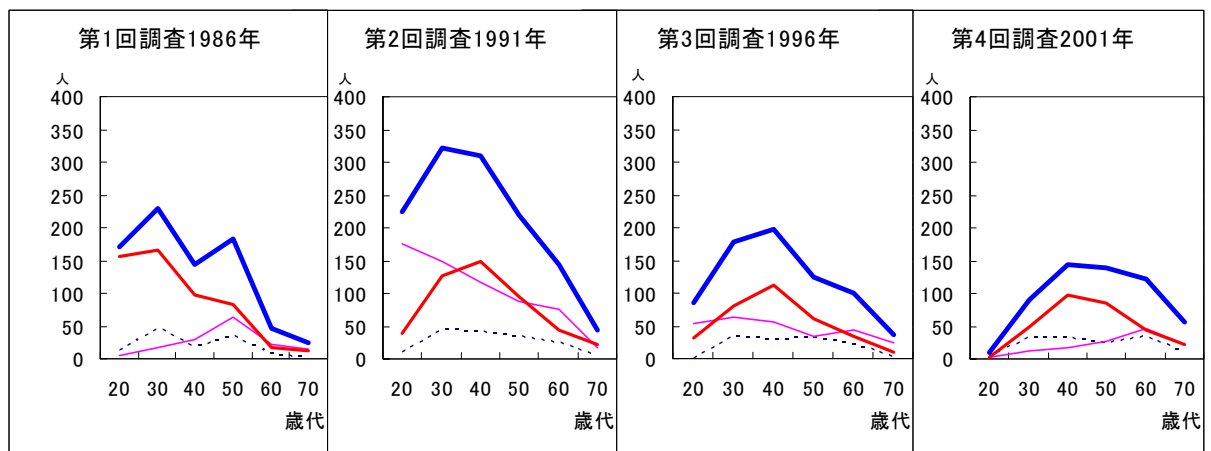


図 5.13 女性の回答者のジャンル別年齢分布（10歳刻み）



6 パネルデータの編成

芸術家調査も4回を重ね、連続調査回答者も数多く含まれているので、無記名調査ではあるが、個人の基本属性を足がかりにして個票レベルでマッチングを行い、パネルデータの編成を試みた。各調査回次共通のユニークなID番号によるマッチングではないので、100%完全なパネルは出来ないため、ここでは一応「擬似パネルデータ」と呼ぶことにする。

6.1 パネルデータ編成手順

パネルデータを編成する際の基本方針は以下の1)～8)とした。

- 1) 時間の経過にも関わらず不変である性別、生年、芸術ジャンルや出生地といった基本属性を使用する
- 2) 個票毎に基本属性からマッチングキーを作成
- 3) 4時点のファイルの個票をマッチングキーで対応づける。
- 4) 一対一に対応する個票はパネルとして保存
- 5) 多対多に対応する個票は、更に新たな属性を一つ加えて対応させる。
- 6) その結果一対一に対応する個票はパネルとして保存
- 7) この段階でまだ多対多の個票は今回のパネルデータに採用しない。
- 8) 一度パネルに採用された個票は繰り返し使わない。

具体的には、以下の手順でパネルデータの編成を行った。

- ① 第1回芸術家調査(1986年実施)、第2回芸術家調査(1991年実施)、第3回芸術家調査(1996年実施)、第4回芸術家調査(2001年実施)の個票ファイルから、マッチングキーを作成するための4つの基本属性(性別、芸術ジャンル:演劇・舞踊・音楽、生年、出生地)と詳細ジャンル、親との続柄、最終学歴学校所在地、最終学歴から成るデータセットをそれぞれつくる。これらの4時点のデータセットはそれぞれ2026件、2423件、1545件、1284件のデータから成る。
- ② まず、調査数の多い第2回調査と第3回調査の2時点のデータセットに対して、性別、芸術ジャンル、生年、出生地からマッチングキーを作成し、組み込む。
- ③ ②のデータセットに対して、基本4属性でユニークに「一対一」対応しているオブザベーション同士を連結して、擬似パネルデータを作成する。
- ④ 基本4属性で「多対多」対応になったものに対して、基本4属性に「詳細ジャンル」を追加したマッチングキーを作成し、ユニークに対応するオブザベーション同士を連結して、擬似パネルデータを作成する。
- ⑤ 基本4属性で「多対多」対応になったものから、上記の④で作成された擬似パネルデータに含まれるオブザベーションを除いたものに対して、基本4属性に「続柄」を追加したマッチングキーを作成し、ユニークに対応するオブザベーション同士を連結して、擬似パネルデータを作成する。
- ⑥ 基本4属性で「多対多」対応になったものから、上記の④、⑤で作成された擬似パネルデータに含まれるオブザベーションを除いたものに対して、基本4属性に「最終学歴学校所在地」を追加したマッチングキーを作成し、ユニークに対応するオブザベーション同士を連結して、擬似パネルデータを作成する。

- ⑦ 基本4属性で「多対多」対応になったものから、上記の④～⑥で作成された擬似パネルデータに含まれるオブザベーションを除いたものに対して、基本4属性に「最終学歴」を追加したマッチングキーを作成し、ユニークに対応するオブザベーション同士を連結して、擬似パネルデータを作成する。
- ⑧ ③～⑦で作成された擬似パネルデータを集めた結果、第2回調査と第3回調査から493個の擬似パネルデータが作成できた。
- ⑨ ⑧で作成された第2回調査と第3回調査から得られた擬似パネルデータ493件と、第4回調査のデータセットに対し、基本4属性からマッチングキーを作成し組み込む。
- ⑩ ⑨で作成した2つのデータセットに対して、③～⑦の手順で順次、擬似パネルデータを作成していく。
- ⑪ ⑩で順次、作成された擬似パネルデータを集めた結果、第2回、第3回、第4回調査の3時点のデータから195個の擬似パネルデータが作成できた。
- ⑫ ⑪で作成された第2回、第3回、第4回調査から得られた擬似パネルデータ195件と、第1回調査のデータセットに対し、基本4属性からマッチングキーを作成し組み込む。
- ⑬ ⑫の2つのデータセットに対して、③、⑤～⑦の手順で擬似パネルデータを作成する。
- ⑭ ⑬で作成された擬似パネルデータを集めた結果、第1回、第2回、第3回、第4回調査の4時点から110個の擬似パネルデータが作成できた。

以下の表6.1に、上の①～⑭に示した一連の作業の過程を示した。第2、3、4回調査から得たパネルデータと第1回個票からのパネルデータを作成する際に「詳細ジャンル」を用いていないのは、現段階での作業では、第1回調査のデータセットに対して詳細ジャンルの項目に該当する変数の整理が未完成であるためである。これは第1回の調査票だけは、専門ジャンルが自由記入欄であり、実査時点のコンピュータのソフトウェアの制約上、カタカナで初期入力が行われていることによる。近いうちに第1回調査の詳細ジャンルを標準化してこの部分の作業を再度やり直す予定である。

表 6.1 パネルデータの作成実験

各回次の個票データ	第1次作業			第2次作業			第3次作業		
	調査回数	第2回	第3回	調査回数	第2・3回	第4回	調査回数	第2・3・4回	第1回
↓	個票数	3537	2746	個票数	パネル	1367	個票数	パネル	2079
		美術家除く件数			美術家除く件数			美術家除く件数	
基本4属性	対応状況	2423	1545	対応状況	493	1284	対応状況	195	2026
	一対一	308		一対一	149		一対一	77	
↓	多対多	514	309	多対多	63	92	多対多	54	134
詳細ジャンル	一対一	101		一対一	27		一対一	 	
	多対多	198	143	多対多	16	24	多対多	 	
↓	続柄	51		一対一	15		一対一	17	
	多対多	186	123	多対多	10	19	多対多	30	68
最終学校所在地	一対一	20		一対一	4		一対一	6	
	多対多	185	107	多対多	6	16	多対多	28	76
↓	最終学歴	13		一対一	0		一対一	10	
	多対多	143	87	多対多	4	9	多対多	19	51
作成パネル数	一対一	493		一対一	195		一対一	110	

(注) 基本4属性 = {4大ジャンル、性別、生年、出生地}

6.2 パネルデータ編成の結果

前節の手順でパネルデータの編成を行った結果、演劇 39、舞踊 8、音楽 63 の合計 110 個のパネルが作成できた。演劇のパネルが少ないのは、調査対象者の名簿が第 2 回調査までと、第 3 回調査以降で異なるためである。また、舞踊のパネルが少ないのは、第 4 回調査の舞踊の回答者数が少ないためである。

パネルデータ及び元の各回次の個票データの平均年齢を表 6.2 に示す。パネルデータでは平均年齢が 62 歳、最年少 35 歳、最高齢 81 歳である。別の見方をすれば、パネルデータに含まれる芸術家の第 1 回調査時点(1986 年)における平均年齢は 15 年さかのぼるので、47 歳、最年少 20 歳、最高齢 66 歳ということになり、第 1 回調査の平均年齢 45 歳に近い。

表 6.2 調査回次毎の平均年齢

	件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
パネルデータ	110	62	10	35	81
①1986年調査	2,066	45	13	16	93
②1991年調査	3,496	53	16	16	99
③1996年調査	2,729	55	15	16	97
④2001年調査	1,359	55	12	24	96

【注】パネルデータは2001年の年末現在の年齢

①～④はそれぞれ調査時点の年末現在の年齢

パネルデータおよびオリジナルの 4 時点の個票データの 5 歳刻みの年齢分布を、男女別に表(表 6.3)とグラフ(図 6.1)に、左右に対応させて表示した。年齢は当該調査年の年末現在の年齢である。また、パネルデータの年齢は、第 4 回調査に合わせて、2001 年末現在で計算している。

パネルデータおよびオリジナルの 4 時点の個票データから、本人収入、定期収入、家族収入の平均額をジャンル別にそれぞれ計算した(表 6.4)。双方の数字を比較すると、対応する時点のオリジナルデータとパネルデータの間で、整合性は採れている。舞踊はパネルの個数が少ないので、単独では余り意味がない。

表 6.3 男女別年齢分布表

パネルデータの年齢分布			
5歳刻み	男性	女性	合計
35～39	1	1	2
40～44	1	2	3
45～49	5	6	11
50～54	7	7	14
55～59	7	5	12
60～64	10	6	16
65～69	14	11	25
70～74	15	3	18
75～79	8	0	8
80歳以上	0	1	1
合計	68	42	110

第1回調査の年齢分布			
5歳刻み	男性	女性	合計
15～19	9	15	24
20～24	25	77	102
25～29	70	83	153
30～34	120	115	235
35～39	166	117	283
40～44	151	81	232
45～49	131	64	195
50～54	190	106	296
55～59	205	82	287
60～64	77	29	106
65～69	46	23	69
70～74	24	15	39
75～79	23	5	28
80歳以上	8	5	13
合計	1245	817	2062

第2回調査の年齢分布			
5歳刻み	男性	女性	合計
15～19	0	18	18
20～24	3	67	70
25～29	27	139	166
30～34	81	156	237
35～39	113	167	280
40～44	147	170	317
45～49	185	148	333
50～54	163	118	281
55～59	338	156	494
60～64	347	120	467
65～69	224	74	298
70～74	163	47	210
75～79	133	16	149
80歳以上	134	17	151
合計	2058	1413	3471

第3回調査の年齢分布			
5歳刻み	男性	女性	合計
15～19	0	2	2
20～24	2	21	23
25～29	17	65	82
30～34	70	92	162
35～39	88	103	191
40～44	122	103	225
45～49	189	127	316
50～54	174	104	278
55～59	162	96	258
60～64	301	93	394
65～69	283	73	356
70～74	152	45	197
75～79	106	21	127
80歳以上	102	16	118
合計	1768	961	2729

第4回調査の年齢分布			
5歳刻み	男性	女性	合計
20～24	2	0	2
25～29	5	11	16
30～34	14	40	54
35～39	38	58	96
40～44	58	82	140
45～49	89	72	161
50～54	121	88	209
55～59	106	61	167
60～64	97	53	150
65～69	108	74	182
70～74	94	38	132
75～79	25	9	34
80歳以上	7	8	15
合計	764	594	1358

図 6.1 男女別年齢分布図

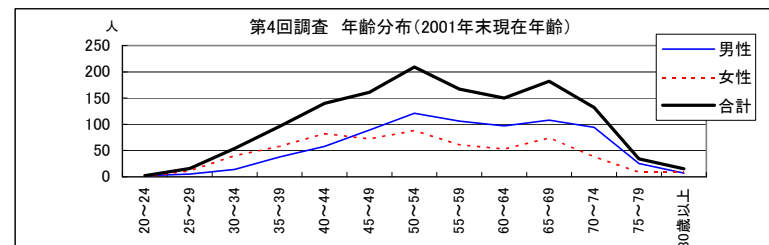
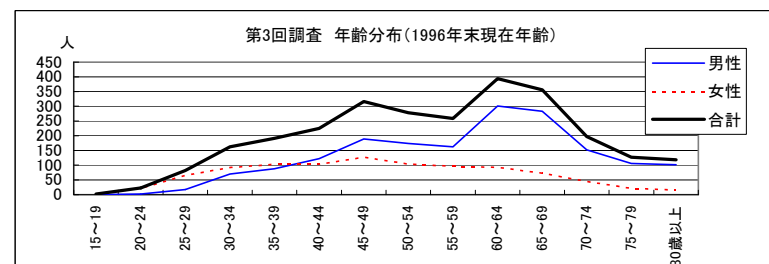
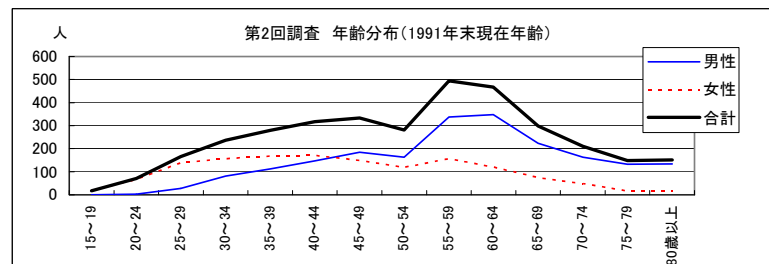
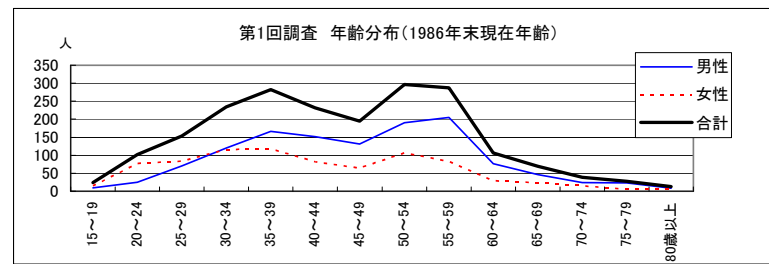
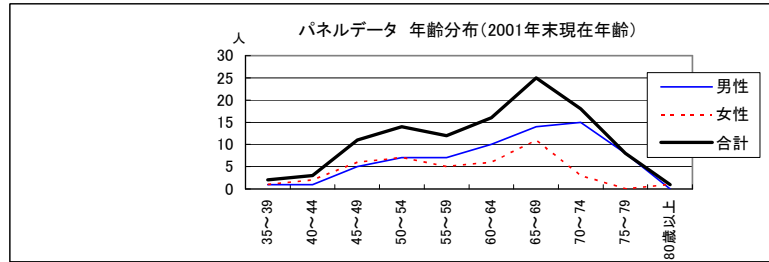


表 6.4 年収の比較

オリジナルデータ

本人定期収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	1927	389	336	3000	300	4
	演劇	50	339	349	2500	220	5
	舞踊	209	392	319	3000	300	5
	音楽	1217	408	331	2000	320	4
第二回	3ジャンル	1528	473	490	6500	330	0
	演劇	365	441	443	3000	300	0
	舞踊	444	366	494	4200	240	0
	音楽	719	557	495	6500	450	0
第三回	3ジャンル	892	465	503	8000	350	0
	演劇	263	357	342	2000	250	0
	舞踊	166	387	471	4600	300	0
	音楽	463	554	571	8000	450	0
第四回	3ジャンル	725	435	447	4000	300	0
	演劇	312	343	364	3000	240	0
	舞踊	89	374	395	2500	240	0
	音楽	325	540	507	4000	400	0

パネルデータ

本人定期収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	109	417	317	1250	330	5
	演劇	38	383	354	1250	240	5
	舞踊	8	332	198	575	328	100
	音楽	63	448	306	1200	340	24
第二回	3ジャンル	75	532	399	1500	450	0
	演劇	26	531	432	1500	500	0
	舞踊	3	480	302	800	440	200
	音楽	46	536	392	1500	450	0
第三回	3ジャンル	61	546	490	2000	400	0
	演劇	21	434	508	2000	300	0
	舞踊	6	523	419	1000	490	0
	音楽	34	618	490	2000	490	10
第四回	3ジャンル	58	431	417	1760	300	0
	演劇	23	285	341	1500	150	0
	舞踊	4	285	298	700	200	40
	音楽	31	558	447	1760	450	50

本人収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	2003	548	557	8650	425	1
	演劇	533	526	530	5000	380	5
	舞踊	223	607	713	8650	475	35
	音楽	1247	547	536	8000	425	1
第二回	3ジャンル	2220	607	600	8000	450	0
	演劇	549	575	611	6000	400	0
	舞踊	644	455	558	6000	300	0
	音楽	1027	718	597	8000	600	0
第三回	3ジャンル	1421	607	599	9100	500	0
	演劇	428	547	649	9100	400	0
	舞踊	266	473	511	4600	360	0
	音楽	727	691	586	8000	600	0
第四回	3ジャンル	1110	601	535	5000	480	0
	演劇	466	480	403	3000	360	0
	舞踊	141	622	635	4767	500	14
	音楽	503	708	586	5000	600	0

本人収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	110	557	384	2200	475	18
	演劇	39	590	443	2200	475	18
	舞踊	8	393	196	670	408	140
	音楽	63	557	361	1520	475	24
第二回	3ジャンル	106	642	403	1500	524	30
	演劇	39	588	384	1500	500	30
	舞踊	6	480	332	1100	440	197
	音楽	61	693	418	1500	600	50
第三回	3ジャンル	107	741	569	3000	600	0
	演劇	38	742	686	3000	400	50
	舞踊	8	548	417	1300	450	180
	音楽	61	766	507	2000	700	0
第四回	3ジャンル	95	592	414	2000	500	50
	演劇	36	527	429	2000	400	70
	舞踊	6	440	184	700	400	250
	音楽	53	654	417	1820	600	50

世帯収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	2001	801	598	8650	725	5
	演劇	533	680	522	5000	550	5
	舞踊	221	898	766	8650	775	68
	音楽	1247	836	587	8500	775	5
第二回	3ジャンル	2214	944	785	8000	800	0
	演劇	548	797	706	6500	600	14
	舞踊	642	877	811	7980	700	0
	音楽	1024	1064	791	8000	900	0
第三回	3ジャンル	1420	933	755	9100	750	40
	演劇	428	760	707	9100	600	40
	舞踊	265	908	763	6000	700	80
	音楽	727	1044	760	8000	900	70
第四回	3ジャンル	1109	866	686	7000	700	20
	演劇	466	686	548	5000	520	20
	舞踊	141	884	764	4767	700	28
	音楽	502	1027	738	7000	985	20

世帯収入	件数	平均値	標準偏差	最大値	中央値	最小値	
第一回	3ジャンル	110	825	703	7000	788	34
	演劇	39	741	437	2200	700	35
	舞踊	8	619	220	1000	550	330
	音楽	63	902	855	7000	850	34
第二回	3ジャンル	106	1013	702	5000	965	110
	演劇	39	859	536	2500	800	110
	舞踊	6	755	423	1500	715	197
	音楽	61	1136	793	5000	1000	200
第三回	3ジャンル	107	1132	1003	8000	900	100
	演劇	38	1038	867	4000	650	100
	舞踊	8	689	397	1300	665	180
	音楽	61	1249	1118	8000	1000	200
第四回	3ジャンル	95	830	529	2400	700	50
	演劇	36	738	582	2300	520	80
	舞踊	6	525	244	900	500	250
	音楽	53	928	495	2400	1000	50

※「オリジナルデータ」では金額が1億円以上の個票は除いている

(単位:万円)

6.3 パネルデータによる過去 15 年間の芸術家の年収の増減

ここでは、パネルデータによる過去 15 年間の芸術家の年収の増減状況を分析する。その第 1 の目的は、もちろん芸術家の生活実態を経済的に解析することにあるが、実はもう一つの狙いがある。それは、編成したパネルデータが本当に意味を持つかどうかを評価できる客観的基準の一つとして、個人所得の利用の可能性である。つまり、5 年間の個人所得の増減は、ある常識の範囲内で変動すると考えるのが合理的であり、パネルを編成したときに、その増減状況により、そのパネルデータの「もってもらしさ」を検証できるのではないかと考えた訳である。

定期的収入、本人年収、家族年収について、第 2 回÷第 1 回、第 3 回÷第 2 回、第 4 回÷第 3 回を計算することによって、年収の 5 年毎の増減率の比較を試みた(表 6.5)。いずれの収入額も、第 1 回から第 2 回の収入の上昇率が大きいのはいわゆるバブル経済の影響と思われる。

更に詳細な収入の分析が可能であるが、紙幅の制限上、別の機会に廻すことにする。

表 6.5 パネルデータにおける 3 時点の年収増減率

		件数	平均値	標準偏差	最大値	最小値	最小値
定期収入	第 1 回から第 2 回	74	6.2	23.4	160.0	1.3	0.0
	第 2 回から第 3 回	38	1.0	0.6	2.7	1.0	0.0
	第 3 回から第 4 回	30	1.1	1.8	10.0	0.9	0.0
本人年収	第 1 回から第 2 回	106	2.1	4.1	37.1	1.2	0.1
	第 2 回から第 3 回	103	1.7	3.6	30.0	1.1	0.0
	第 3 回から第 4 回	91	1.1	1.1	8.5	0.9	0.0
家族年収	第 1 回から第 2 回	106	2.0	4.7	42.1	1.3	0.1
	第 2 回から第 3 回	103	1.4	1.7	14.0	1.1	0.2
	第 3 回から第 4 回	91	0.9	0.6	4.0	0.9	0.0

6.4 今後の展開

今回は、パネルデータを使って、収入について簡単な分析をするに留めているが、他の調査項目の分析をする時でも簡単な作業だけでパネルデータが編成できる。実際には、パネルデータにはペアとなる個票の ID 番号(調査回次ごとにユニークに付与されている)の組み合わせだけを保持しているので、その ID 番号を使って、必要に応じて、各回次の必要項目のデータを抜き出すことができるように設計している。

4 時点全てをつないでパネルを作成すると、どうしてもパネルの個数が少なくなる。調査票の設計でも述べたように、多数の調査項目を 2 つの調査票 A 票と B 票に分割して、2 回連続する調査対象者からは調査 2 回分で A 票と B 票の回答が揃うようにしているので、連続する 2 回の調査回次データからパネルを作ればミクロのレベルで A 票と B 票の項目間の関連を分析することが出来る。連続する 2 時点ならパネルの数はかなり期待できる。今回は時間の制約上、4 時点のパネルを作成するに留めたが、次に残された作業として、この A 票と B 票を組み合わせる作業がある。ただし、4 時点のパネルを編成する作業でも、異なる 2 時点のデータセットを順次マッチングして行っているため、A 票と B 票の組み合わせ作業でも開発済みのプログラムがそのまま利用でき、技術的な問題は既に全てクリアしていることになる。

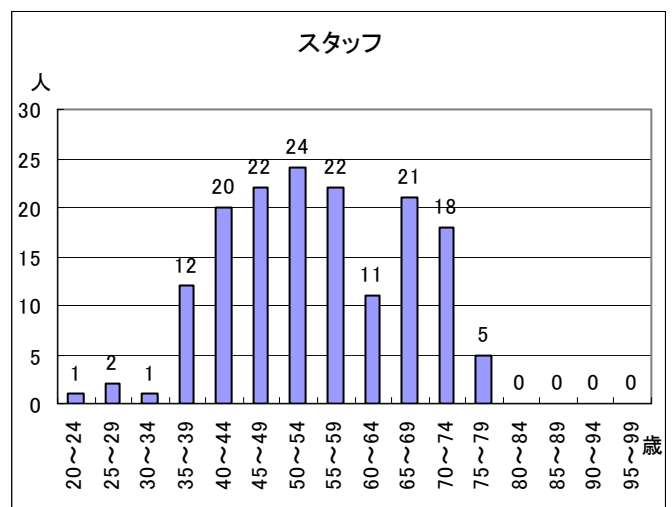
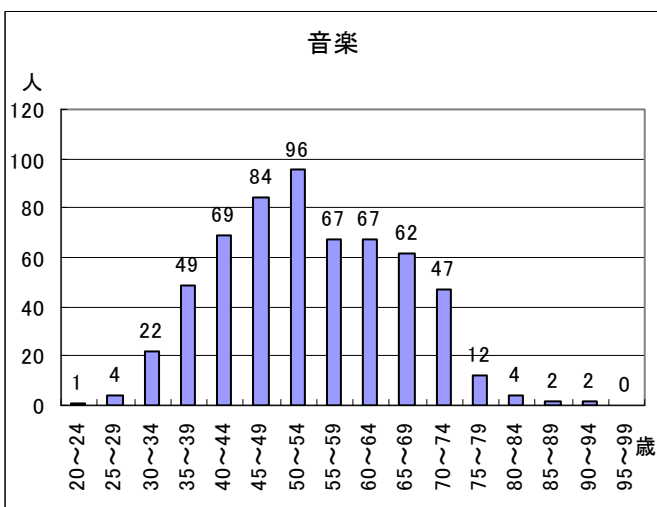
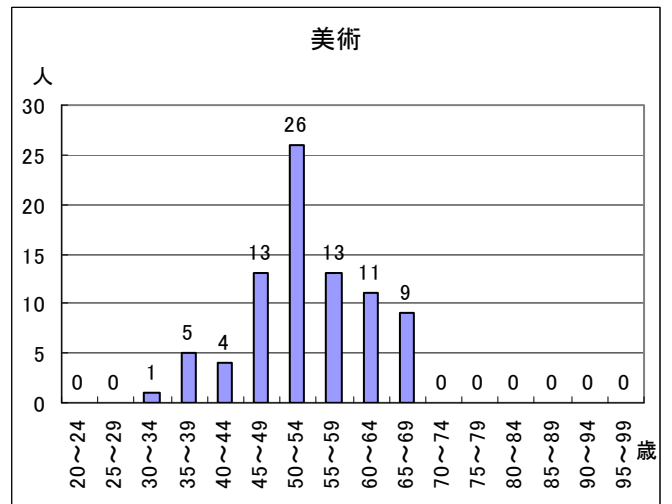
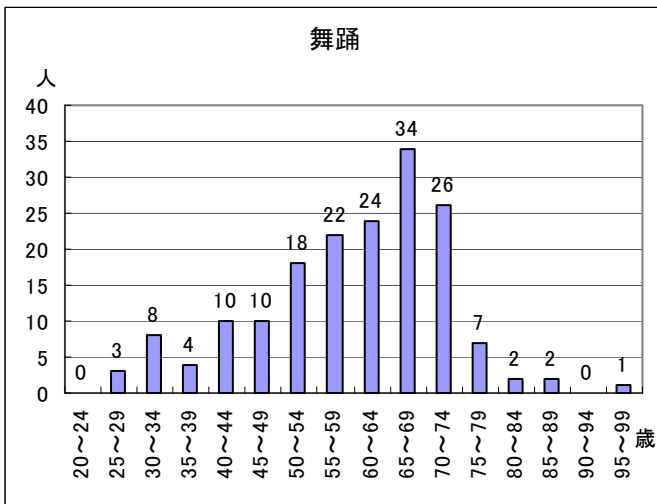
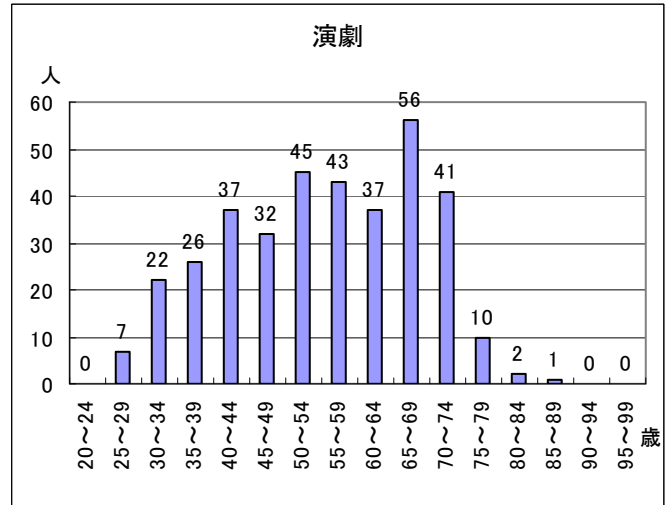
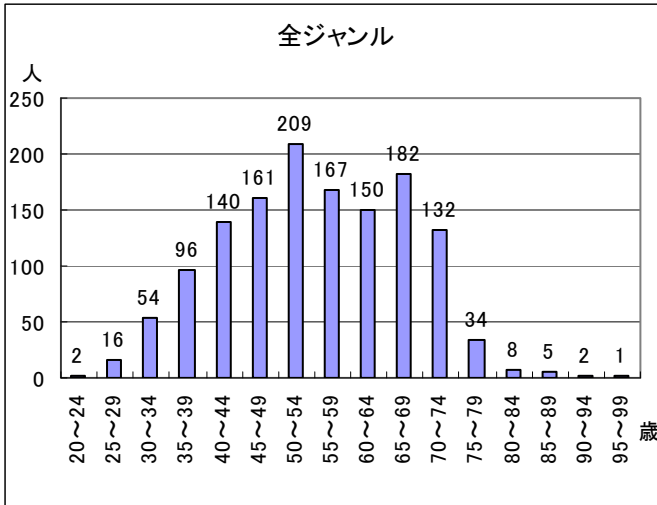
【謝辞】

本研究に当たって、文部科学省科学研究費特別研究促進費(1)(研究代表者：平成 13～14 年度：若松美黄、平成 15 年度：周防節雄、研究課題番号 13800007)による補助を受けている。入力データの整理やプログラミング作業では研究協力者の岸本容司氏から協力を得ることができた。また、本研究で使用した第 1 回～第 3 回までの芸術家調査のデータファイルは、2.2 節で言及した 3 つのプロジェクトチームで実施・作成された調査データファイルである。いずれも筆者が関わっているが、実際の作業では数多くの人々の手を煩わせた。記して謝意に替えたい。なお、これまでの 4 回の芸術家調査の実査の際には、(社)日本演奏連盟、全日本舞踊連合、(社)現代舞踊協会、日本新劇俳優協会、日本演出者協会、日本新劇経営製作者協会、日本演劇音響効果家協会、舞台監督協会、(社)日本美術家連盟の各ジャンルの団体名簿を利用させて頂いた。これら関係各位にも感謝の意を表したい。

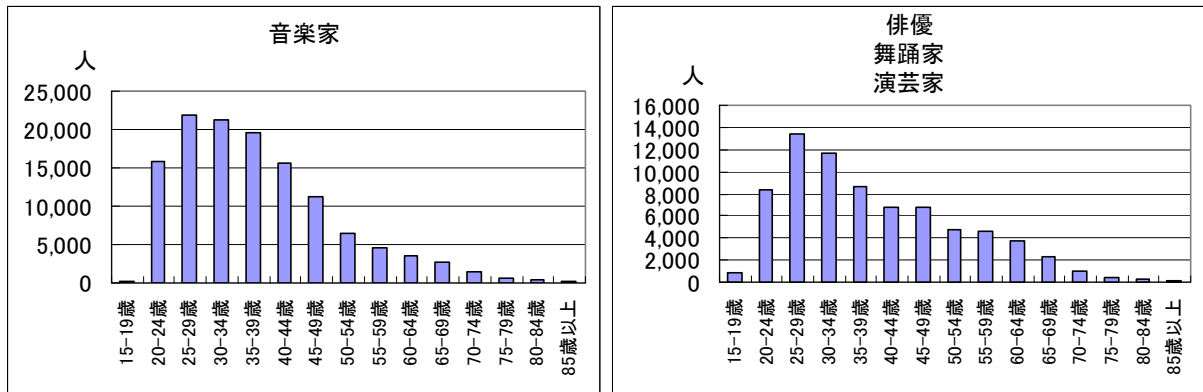
【参考文献】

- [1] 三善晃『わが国の芸術活動の動向予測に関する基礎研究[詳細編]』、科研報告書、1988 年。
- [2] 三善晃『わが国の芸術活動の動向予測に関する基礎研究[資料編]』、科研報告書、1988 年。
- [3] 周防節雄「日本の芸術家の構造とその家系の影響」『商大論集』第 49 巻第 5 号、1998 年
- [4] 周防節雄「パネルデータによる日本の芸術家の生活実態の分析 — 芸術家の年収と世帯収入の構造分析 —」『統計情報活用のフロンティアの拡大の総合的研究 — ミクロデータによる社会構造分析 — 1996-1998 年度報告書』、1999 年
- [5] Setsuo Suoh, Sadanori Nagayama and Yoshiro Matsuda, Structural Analyses of Japanese Artists', *Proc. of International Symposium on Cultural Economics in Tokyo*, 1999.

付図1 第4回芸術家調査全回答者のジャンル別年齢分布



付図2 [参考] 『日本統計年鑑 2004』による文化関連職業従事者数



付表1 A票回答者：ジャンル別の現住地

ジャンル	演劇		舞踊		美術		音楽		スタッフ		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
北海道・東北	1	0.5	11	11.3	1	2.4	11	3.0	1	1.1	25	3.2
関東	20	10.7	16	16.5	5	12.2	35	9.6	8	8.9	84	10.8
東京	137	73.3	50	51.5	7	17.1	155	42.5	43	47.8	392	50.3
神奈川	18	9.6	6	6.2	10	24.4	47	12.9	9	10.0	90	11.5
北陸・中部	0	0.0	2	2.1	0	0.0	5	1.4	3	3.3	10	1.3
東海	4	2.1	4	4.1	3	7.3	13	3.6	8	8.9	32	4.1
近畿	2	1.1	0	0.0	2	4.9	32	8.8	3	3.3	39	5.0
京都	1	0.5	1	1.0	4	9.8	6	1.6	3	3.3	15	1.9
大阪	3	1.6	3	3.1	4	9.8	23	6.3	5	5.6	38	4.9
中国・四国・九州	1	0.5	4	4.1	3	7.3	25	6.8	7	7.8	40	5.1
外国	0	0.0	0	0.0	2	4.9	13	3.6	0	0.0	15	1.9
計	187	100.0	97	100.0	41	100.0	365	100.0	90	100.0	780	100.0

付表2 A票回答者：現住地と出生地の関係

現住地	北海道・東北		関東		東京		神奈川		北陸・中部		東海		近畿		京都		大阪		中国・四国・九州		外国		合計	
	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
北海道・東北	22	28.9	1	2.2	2	0.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	25	3.2
関東	8	10.5	22	47.8	21	8.6	3	5.7	5	11.6	4	5.9	5	11.1	1	4.5	5	7.6	0	0.0	3	17.6	84	10.8
東京	37	48.7	19	41.3	175	71.4	20	37.7	23	53.5	24	35.3	11	24.4	10	45.5	19	28.8	43	43.9	10	58.8	392	50.3
神奈川	4	5.3	2	4.3	26	10.6	27	50.9	4	9.3	9	13.2	2	4.4	0	0.0	3	4.5	1	11.2	2	11.8	90	11.5
北陸・中部	0	0.0	0	0.0	2	0.8	0	0.0	7	16.3	0	0.0	0	0.0	1	4.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	10	1.3
東海	1	1.3	1	2.2	3	1.2	1	1.9	2	4.7	23	33.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	5.9	32	4.1
近畿	1	1.3	0	0.0	1	0.4	0	0.0	1	2.3	2	2.9	19	42.2	3	13.6	10	15.2	1	11.2	1	5.9	39	5.0
京都	0	0.0	0	0.0	2	0.8	0	0.0	1	2.3	1	1.5	1	2.2	4	18.2	4	6.1	2	2.0	0	0.0	15	1.9
大阪	2	2.6	0	0.0	2	0.8	1	1.9	0	0.0	3	4.4	3	6.7	2	9.1	22	33.3	3	3.1	0	0.0	38	4.9
中国・四国・九州	1	1.3	0	0.0	4	1.6	0	0.0	0	0.0	1	1.5	2	4.4	1	4.5	1	1.5	30	30.6	0	0.0	40	5.1
外国	0	0.0	1	2.2	7	2.9	1	1.9	0	0.0	1	1.5	2	4.4	0	0.0	2	3.0	1	1.0	0	0.0	15	1.9
計	76	100.0	46	100.0	245	100.0	53	100.0	43	100.0	68	100.0	45	100.0	22	100.0	66	100.0	98	100.0	17	100.0	780	100.0